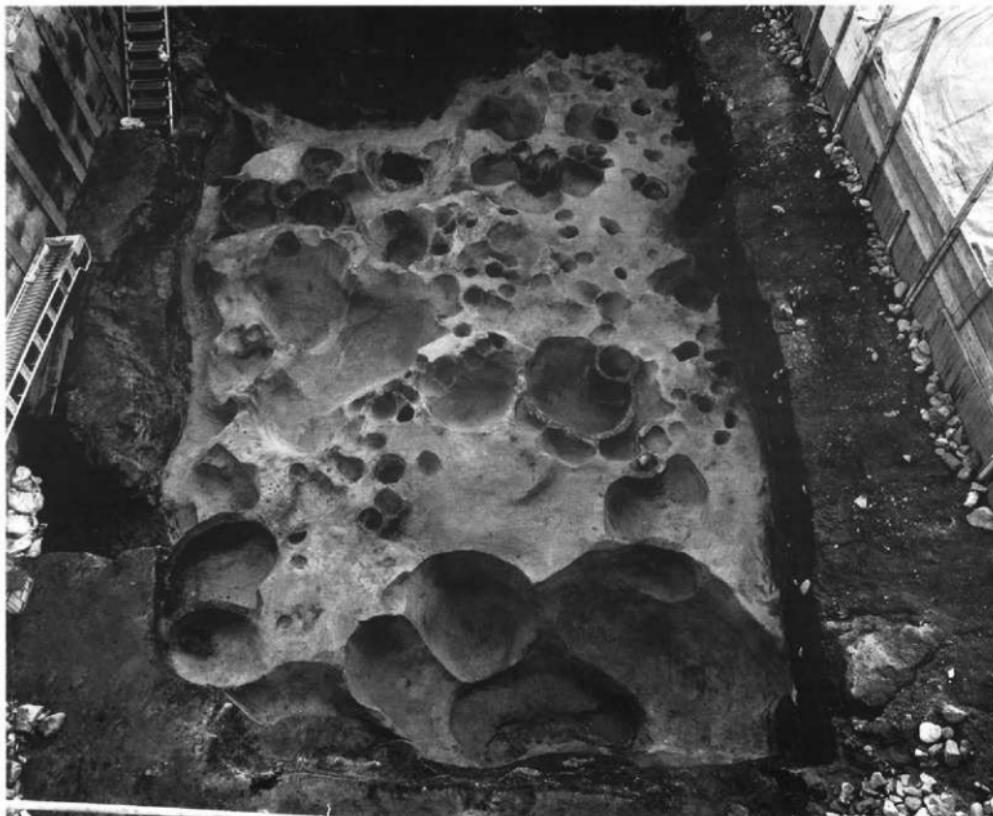


# 博 多 72

—博多遺跡群第110次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第630集



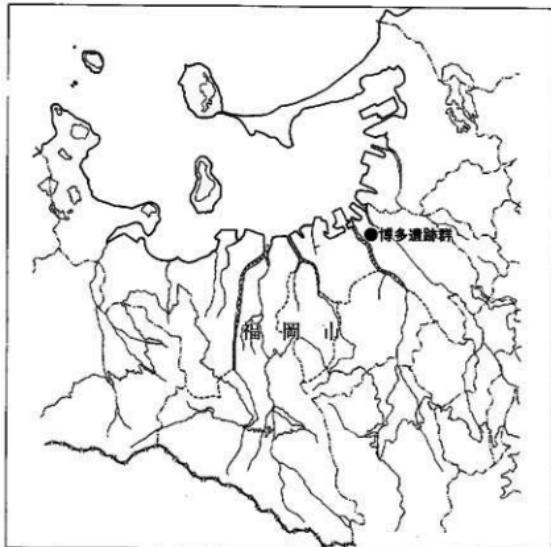
2 0 0 0

福岡市教育委員会

# 博 多 72

—博多遺跡群第110次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第630集



調査番号 9827  
遺跡番号 HKT-110

2 0 0 0

福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします博多遺跡群は中世の国際貿易都市として知られています。今回の調査でもそれを裏付けるような多量の貿易陶磁をはじめ、数多くの文化財が発見されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました株式会社福島工務店をはじめ関係各位の皆様には、心より感謝申し上げます。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 西 竜一郎

## 例　　言

1. 本書は、福岡市博多区店屋町152ほか3筆の共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が1998（平成10）年8月24日から11月3日にかけて発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第110次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、溝→S D、井戸→S E、土坑→S K、その他→S X、ピット→S Pとした。遺構番号はピット以外を1面は101から、2面は201から、3面は301から、4面は401から付け、種類に関係なく連番とした。ピットは別に番号を付け、1面は1001から、2面は2001から、3面は3001から、4面は4001から付けた。
3. 本書に使用した遺構実測図は春出城二、藤野雅基、伊藤健太、坂口剛毅、田上勇一郎が作成した。遺物実測図は武下里織、西山めぐみ、坂本真一、津曲大輔が作成した。また、製図には、藤野、武下、西山、津曲、丸井節子、田上があたった。
4. 本書に使用した写真は田上が撮影した。
5. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
6. 出土した陶磁器の分類は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会 1984）による。
7. 本書の編集・執筆は田上が行った。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

## 目　　次

I はじめに .....	1
1. 調査にいたる経緯 .....	1
2. 調査の組織 .....	1
3. 調査地点の立地と環境 .....	2
II 調査の記録 .....	4
1. 調査の経過と概要 .....	4
2. 第1面の調査 .....	6
3. 第2面の調査 .....	11
4. 第3面の調査 .....	15
5. 第4面の調査 .....	28
6. 包含層の遺物 .....	37
7. 墨書き陶磁器 .....	38
8. 製鉄関連遺物 .....	40
9. 銭 .....	42
III まとめ .....	44

# I はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

1998（平成10）年4月10日付で、株式会社福島工務店代表取締役福島賀氏から福岡市博多区店屋町152ほか3筆における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地が博多遺跡群の範囲内であり、これまで西側、南側の隣接地で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は5月21日に実施し、対象地西側に東西方向に設けたトレーニチから、非戸、土坑が検出され、土師器、白磁碗などが出土した。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者と集合住宅建設によって破壊される遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。本調査は株式会社福島工務店の受託調査として8月24日より11月3日まで実施した。また、整理作業と報告書の刊行は1999（平成11）年度に行なった。

## 2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

調査委託 株式会社福島工務店 代表取締役 福島賀  
調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（調査年度）  
西憲一郎（整理年度）  
調査総括 埋蔵文化財課 課長 柳田純孝（調査年度）  
山崎純男（整理年度）  
調査第2係長 山口謙治（調査年度）  
力武卓治（整理年度）  
調査庶務 文化財整備課 河野淳美  
調査担当 埋蔵文化財課事前審査係 杉山富雄 屋山洋（試掘調査）  
調査第2係 田上勇一郎（本調査）  
調査補助 春田城二 藤野雅基  
調査作業 安藤峰正 伊藤健太 岩崎良隆 上野龍夫 江崎光子 岡部静江 小川秀雄 小野千佳  
黒瀬千鶴 古賀義博 坂口剛毅 坂本真一 真田弘二 篠崎伝三郎 芹野謙成 大長正弘  
高崎秀巳 高野瑛子 武田潤子 谷英二 堤正子 徳永静雄 布江孝子 廣田安平  
松井一美 森本勇夫 山下智子 吉住政光  
整理補助 武下里穂、西山めぐみ  
整理作業 木村良子 丸井節子 山木良子 尾崎君枝 加集和子 坂本真一 津曲大輔  
発掘調査に至るまでの条件整備や調査中の調整などに関して、株式会社福島工務店には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。記して感謝する。

調査番号	9827	遺跡番号	HKT-110
調査地地籍	博多区店屋町152他3筆	布地図番号	天神 49
開発面積	307.73m <sup>2</sup>	調査対象面積	186m <sup>2</sup>
調査期間	1998年（平成10年）8月24日～11月3日	調査面積	186m <sup>2</sup>

### 3. 調査地点の立地と環境

博多遺跡群は玄界灘に面する博多湾岸の砂丘上に位置する遺跡である。玄界灘を渡ると朝鮮半島、さらにその向こうには中国大陆があり、日本の中でもっとも大陸に近い地域にある。その立地から、古くから大陸の影響を受けてきた。特に古代から中世にかけては国際貿易都市として発展し、出土する遺物も国際色豊かなものである。大量の中国からの輸入陶磁器は国内に類を見ない。また、朝鮮、タイ、ベトナムなどからもたらされた陶磁器類も日を引くところである。

博多遺跡群が立地する砂丘は、現地表の微地形やボーリング調査、文化財発掘調査等により、海岸線に沿って3列並んでいることがわかつてきた。一番海寄りは「息の浜」と呼ばれる。陸地化するのは比較的遅かったようで、おもに13世紀以降都市化が進んだ。陸地側2列は「博多浜」と仮称している。息の浜と博多浜の砂丘は11世紀後半頃中央部でつながり、両側は海が湾入していた。この西側の湾入部付近が今回の調査地点にあたる。

博多遺跡群では130ヶ所を超える調査が行われているがこの周辺ではこれまで14次、56次、77次、87次と調査が行われている。以下に概要を記す。

14次調査地点は110次調査地点の西隣にあたる。波打ち際に堆積したと思われる泥土層を検出した。12世紀前半の白磁の集積が検出された。貿易船から陸揚げする際に不良品を一括廃棄したものではないかと考えられている。

56次調査地点は110次調査地点の南東60mにあたる。東側は標高2.8m、西側は標高2.0mで地山の黄褐色砂が現れており、西側に傾斜している。古墳時代以降の遺構を検出している。

土坑中の一边約1m四方の中から白磁片が多量に出土した。11世紀後半の遺構と考えられる。白磁碗は完形に近いが、どこか一部を欠損していた。また、底面近くには割れた大型の陶器壺が出土している。出土状況から、一边1m前後の底付の木箱の中に割れた陶磁器を投棄したものと想定されている。

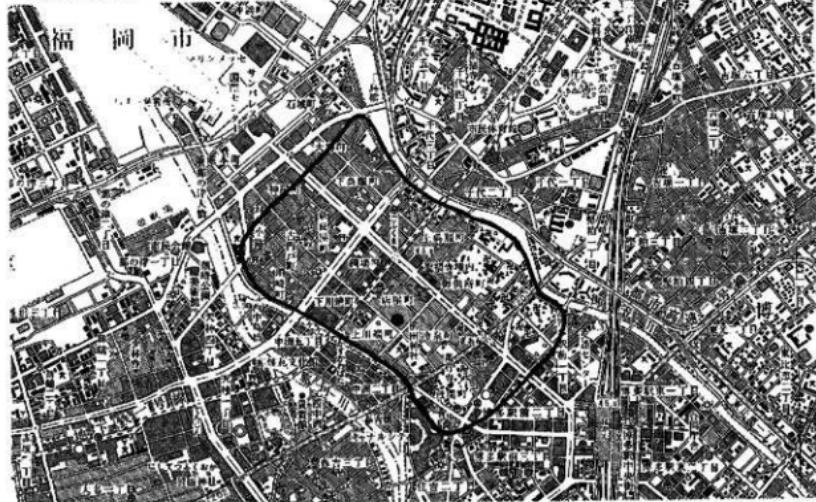


Fig. 1 博多遺跡群と調査地点の位置 (1/25,000)

る。上坑に廃棄されていること、土器器類を少量混入することが14次調査地点の白磁の集積と異なる。14次調査より内陸に位置していることから、いったん陸揚げされた後、選別されて不良品を廃棄したものと考えられている。

77次調査地点は110次調査地点の南隣にあたる。標高3.0mで砂丘上面にあたる。奈良時代以降の遺構が検出されている。越州窯系青磁や綠釉陶器などが出土し、平安時代の一般集落を優越する内容である。また、11世紀後半の遺構密度が高いことが指摘されている。

87次調査地点は110次調査地点の西80mにあたる。基盤の砂丘面ではない。13世紀代に堆積、埋め立てが進み、14世紀以降の遺構が存在する。16世紀代の道路の検出やベトナム青磁碗の出土が特筆される。

#### 参考文献

- 14次調査 池崎謙二・森本朝子 1988「博多出土北宋後半期の貿易陶磁」日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』No.8
- 56次調査 滝石哲也・菅波正人・林田憲三 1993『博多34』福岡市埋蔵文化財調査報告書第326集 福岡市教育委員会
- 77次調査 大庭康時 1995『博多45』福岡市埋蔵文化財調査報告書第394集 福岡市教育委員会
- 87次調査 大庭康時 1996『博多49』福岡市埋蔵文化財調査報告書第4143集 福岡市教育委員会

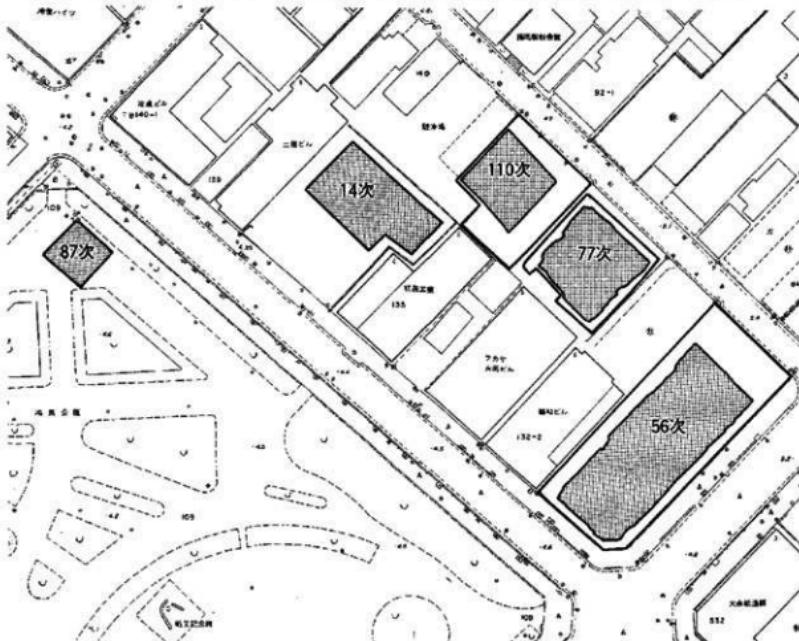


Fig. 2 調査地点の位置と周辺の調査地点 (1/1,000)

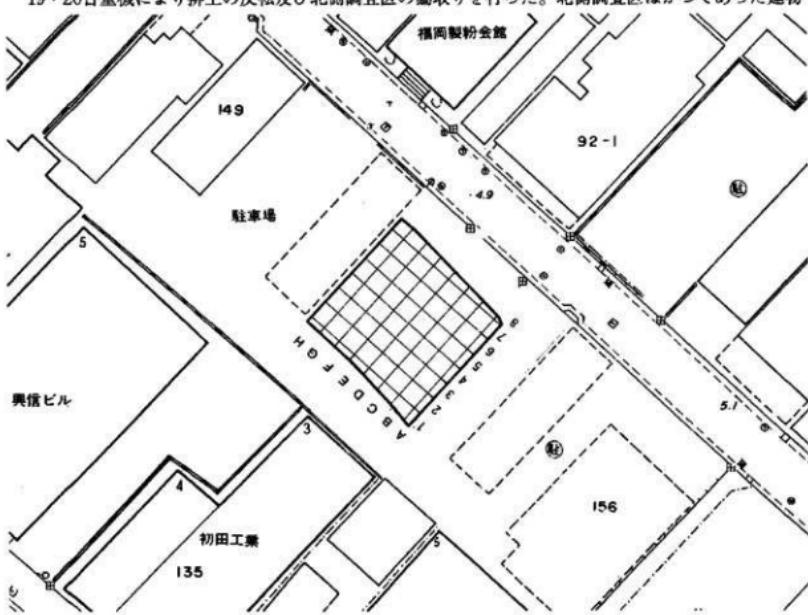
## II 調査の記録

### 1. 調査の経過と概要

調査区は建物予定部分の矢板で囲まれた部分である。また、矢板設置のため南側と東側は大きく掘削されている。調査に入る以前に福島工務店の手により1.5m掘取りが行われ、場外搬出された。残りの土は場内処理のため、調査区を南北に分け、南側より開始することにした。

発掘調査は8月24日より開始した。地表下1.5mで第1面の調査を開始したが、基本土層は汚れた灰褐色土であり、遺構検出に困難を極めた。少し厚めに表面を削り、遺構検出に努めた。第1面では遺構は少なかったが、遺構検出に手間取ったことや矢板設置時の攪乱除去に時間がかかり調査は遅れ気味となった。8月31日に全景写真を撮影し、残りの実測を行いつつ、9月2日より手掘りで第2面目まで掘削を開始した。包含層の遺物は $2 \times 2$ m四方のグリッドで取り上げた。9月10日全景写真撮影のうち、11日第3面へ掘り下げを開始した。トレーンチや攪乱の壁の観察より、土層の変化があまり見られなかっただため一気に60cm下げるにした。遺物は上下2層に分けて取り上げることにした。第3面では一部で基盤の黄褐色砂が露出し、この部分は第4面と同じ遺構面となった。全景写真を28日に撮影した後、掘り足しを行い10月2日より5日まで第4面まで掘削した。9日全景写真を撮り、15日、西壁の南側部分のみは矢板が設置されていなかったのでこの部分で基本土層の実測図を作成し、南側の調査区の調査を終了した。

19・20日重機により排土の反転及び北側調査区の掘取りを行った。北側調査区はかつてあった建物



の影響で、第2面まで攪乱されており、攪乱を除去した面で遺構検出を行った。この面は南側調査区の第3面にあたる。若干の高低差があり一部の遺構でつながらないものも出た。23日に全景写真の撮影を行い、26・27日第4面に掘り下げた。29日全景写真撮影を行い、10月30日終了の予定を延長していただき、11月3日までに埋め戻しを完了させ、調査を終了した。

以下に調査の報告を行うが、多くの遺構を検出し、大量の遺物が出土したが、すべてを紹介するには時間も紙数も不足している。遺構については一覧表に概要を示した。遺物についてはいくつかの遺構の遺物をピックアップしたにすぎない。また、調査者の知識不足で重要な遺物を見逃していると思われる。いずれ資料紹介などで補っていきたい。



Ph. 1 調査区西壁土層（東から）

- 1: 黄褐色土、炭化物含む
- 2: 黄褐色土、炭化物含む
- 3: 黄褐色土 黄褐色砂土
- 4: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 5: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 6: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 7: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 8: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 9: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 10: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 11: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 12: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 13: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 14: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 15: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 16: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 17: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 18: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 19: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 20: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 21: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 22: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 23: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 24: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 25: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 26: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 27: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 28: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 29: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 30: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 31: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 32: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 33: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 34: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 35: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 36: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 37: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 38: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 39: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 40: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 41: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 42: 黄褐色砂土
- 43: 黄褐色砂土
- 44: 黄褐色砂土
- 45: 黄褐色砂土
- 46: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 47: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 48: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 49: 黄褐色砂土、炭土ブロック含む
- 50: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 51: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 52: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 53: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 54: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 55: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 56: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 57: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 58: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 59: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 60: 黄褐色砂土、炭化物含む
- 61: 黄褐色砂土、褐色形質土
- 62: 黄褐色砂土、粘土質
- 63: 黄褐色砂土、粘土質
- 64: 黄褐色砂土、粘土質

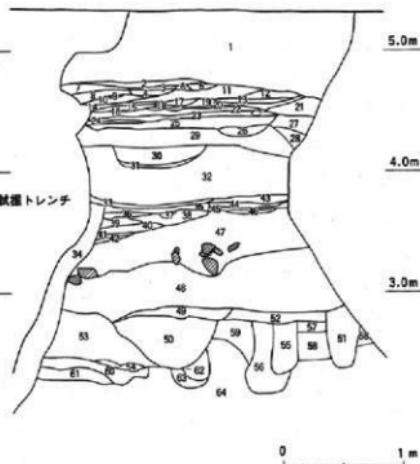


Fig. 4 調査区西壁土層実測図 (1/40)

## 2. 第1面の調査

原因者に鋤取っていただいた後の面を第1面として調査を開始した。標高は3.7m~3.9mである。炭化物を多く含む灰褐色土を基本とする。ただ、部分的にかなり様相が異なり、遺構検出は困難であった。北側の調査区は以前あった建物の基礎で破壊されている。また、矢板を打ち込むときに周囲を掘削しているので、この部分の除去に時間要した。

土坑13基と建物基礎と思われる石列を調査した。16世紀以降、近世を中心とした遺構群と思われる。SK104、SK107は近世の陶磁器類と砾が一括廃棄された土坑である。SX111は石列が90°に曲がる。建物の基礎と考えられる。SX111の東西方向の軸とSK106の長軸方向が一致している。町割りの方位に関係する可能性がある。

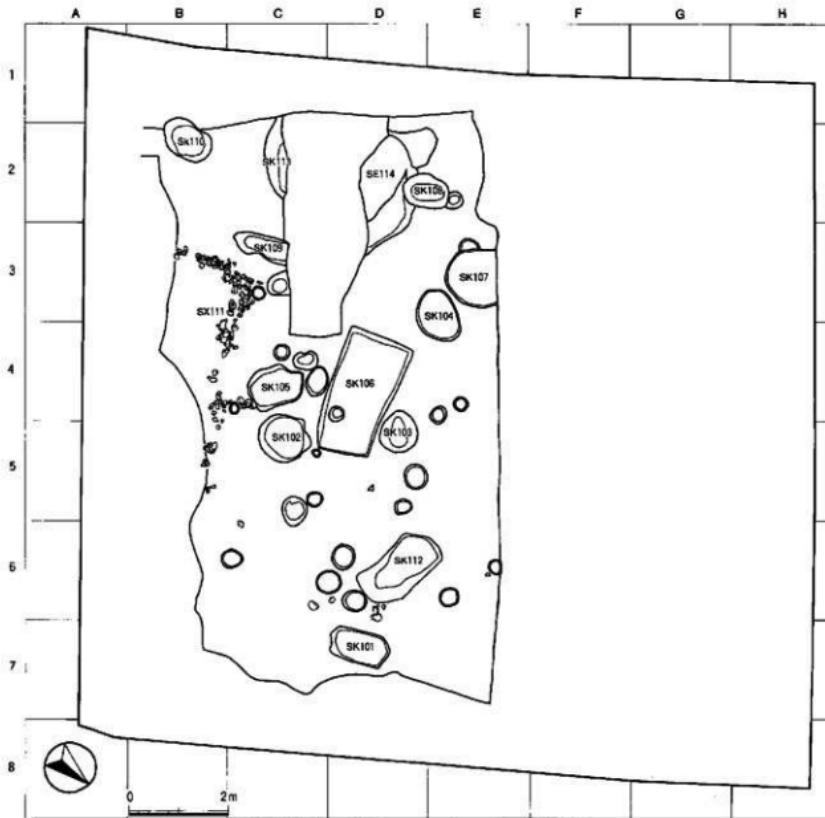


Fig. 5 第1面遺構分布図 (1/100)

S K107とSK110の遺物を示した。

1~18はSK107の出土遺物である。1~7は土師器の皿である。底部はすべて糸切り。小ぶりのものとやや大きめのものがある。1~4は小ぶりで平均口径6.3cm、底径4.9cm、器高1.1cm。5~7はやや大きめで平均口径8.5cm、底径6.1cm、器高1.6cm。8~12は肥前の染付碗である。9は青磁染付。8~10は口縁部を外反させる。口径、器高は8が10.1cm、5.2cm、9が8.6cm、5.0cm、10が7.1cm、4.3cm、11が10.4cm、6.0cm。12の復元口径は9.6cm。13は肥前染付の盃。口径6.6cm、器高2.7cm。14は肥前染付の皿である。高台径8.4cm。15~16は刷毛目唐津の碗である。それぞれ口径11.3cm、12.8cm、器高5.5cm、5.4cmである。豊付



Ph. 2 第1面南側全景（東から）

Tab. 1 第1面遺構一覧

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物 土器・陶器・漆器・瓦器・瓦質 （口径・底径・器高・底径・縫合）
SK101	椎円形土坑	D-7	16C	長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.2m 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む	明治付、白磁片、白磁片、唐津器、土師器等、鉄錠
SK102	円形土坑	C-4・5	16C	長軸1.0m、深さ0.2m 覆土：灰色砂質土・土塗土 1：灰褐色土 2：灰色砂質土・上部剥落？で茶色っぽい 3：灰色砂質土・灰褐色土・灰化物含む	明治付、龍泉系青磁碗V型・皿・盤、白磁碗・盤、白磁皿・白磁片、白磁片、灰褐色土、土師器等（糸切り）、白磁片、白磁片
SK103	椎円形土坑	C-4・5	16C	長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.5m 覆土：灰色砂質土・土塗土 1：灰褐色土 2：灰褐色土・土塗土・灰化物含む 3：灰褐色土 4：灰褐色土	龍泉系青磁碗、白磁碗、碗底器、圓腹碗、瓦質 火盆、火盆、土師器、土師器等（糸切り）、鐵、鉄錠
SK104	椎円形土坑	D-E-3・4	近世	長軸1.0m、短軸0.6m、深さ0.2m 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む	白磁碗、肥前角付、肥前織鉢、瓦質織鉢、瓦、土師器等（糸切り）
SK105	不整形土坑	C-4		長軸1.10m、短軸0.5m、深さ0.2m 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む 2：灰色砂質土	瓦、土師器等
SK106	長方形土坑	C-D-4・5	16C	長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.6m 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む 2：灰色砂質土 3：灰色砂質土・土塗土・灰化物含む 4：粘性あり	明治付、龍泉系青磁碗直筒小鉢、同安系青磁碗・皿、同安系青磁碗・皿、白磁碗・盤、白磁片、V型・V型・瓦質火盆、白磁片、白磁片、白磁片（糸切り）、土師器、青石製石臼、砾石、瓦片、獸骨 盤 7.0-8.1-1.5 糸切り板状瓦痕なし 盤 7.2-8.7-1.3 糸切り板状瓦痕あり 盤 7.4-8.1-1.8 糸切り板状瓦痕あり
SK107	円形土坑	E-3	近世	直径1.1m、深さ0.2m 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む 2：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む	肥前青磁斜口瓶、龍泉系青磁碗・盤、圓腹碗、瓦質碗、瓦、火盆、火盆、土師器等（糸切り）、鐵、鐵錠、鐵、鐵錠、鐵、鐵錠
SK108	椎円形土坑	D-E-2	近世	長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.2m SK114を切る 覆土：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む	龍泉系青磁碗・皿、土師器等（糸切り）・炉 盤 6.6-8.1-1.3 糸切り板状瓦痕なし 灯明皿 盤 9.2-10.1-3 糸切り板状瓦痕なし
SK109	椎円形土坑	C-3		短軸0.4m、深さ0.4m 北側斜面トレンチに切られる 覆土：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む	龍泉系青磁碗I-6、中国陶器、土師器等（糸切り）
SK110	椎円形土坑	B-2	近世	短軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.3m 覆土：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む	龍泉系青磁碗、白磁碗、青白瓷器、肥前角付、白磁、同安系青磁碗、火盆、瓦、瓦質火盆、瓦質火盆、土 師器等（糸切り）・瓦、瓦質火盆
SK111	複合土坑	B-C-S-5		半径4.0m以上・南北2.0m以上、幅0.3~0.4mの標識さ 南側斜面に切られる	白磁碗、中腹輪、瓦質火盆、瓦、土師器等（糸切り）・ 盤 5.4-14.1-1.4 糸切り板状瓦痕あり 盤 6.8-10.1-1.9 糸切り板状瓦痕なし 灯明皿
SK112	椎円形土坑	D-E-6	16C	長軸1.7m、短軸0.9m、深さ0.6m 覆土：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む 2：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む 3：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む 4：灰褐色砂質土・土塗土・灰化物含む	龍泉系青磁碗・皿・盤、同安系青磁碗、 青白磁合子等、白磁碗V・V型・皿、口ハグ碗、中國 陶器等（糸切り）、中國陶器等、青白瓷器、肥前角付、土 師器等（糸切り）・瓦（糸切り）、鐵
SK113	円形土坑	C-2	近世	直径1.7m以上、深さ0.8m以上 北側斜面トレンチに切られる	同安系青白瓷器、白磁碗、瓦、肥前角付、同安陶器、 同安陶器等、瓦質火盆
SK114	円形土坑	D-2・3	近世	直径2.4m以上、深さ1.1m以上 南側斜面トレンチ。北部SK108に切られる 覆土：灰褐色土・土塗土・灰化物含む	中國陶器、肥前角付・白磁、火盆、瓦質火盆、土 師器等（糸切り）・瓦（糸切り）、土師、砾石、鐵、鉄錠

の軸を掻き取る。15は見込みの軸も輪状に掻き取る。17は唐津陶器の大皿である。18は陶器の香炉である。口縁を内側に折り返す。茶色の胎土に灰オリーブ色の不透明釉がかかる。口径10.5cm、器高7.0cm。18世紀以降の遺物である。

19~26はSK110の出土遺物である。19~25は上部器の皿である。底部はすべて糸切り。19は小ぶりの皿である。20~25は大きめで、平均口径9.3cm、底径6.4cm、器高1.7cmである。26は陶器の碗である。口縁部を波状に形成する。口径14.0cm、器高6.1cm。

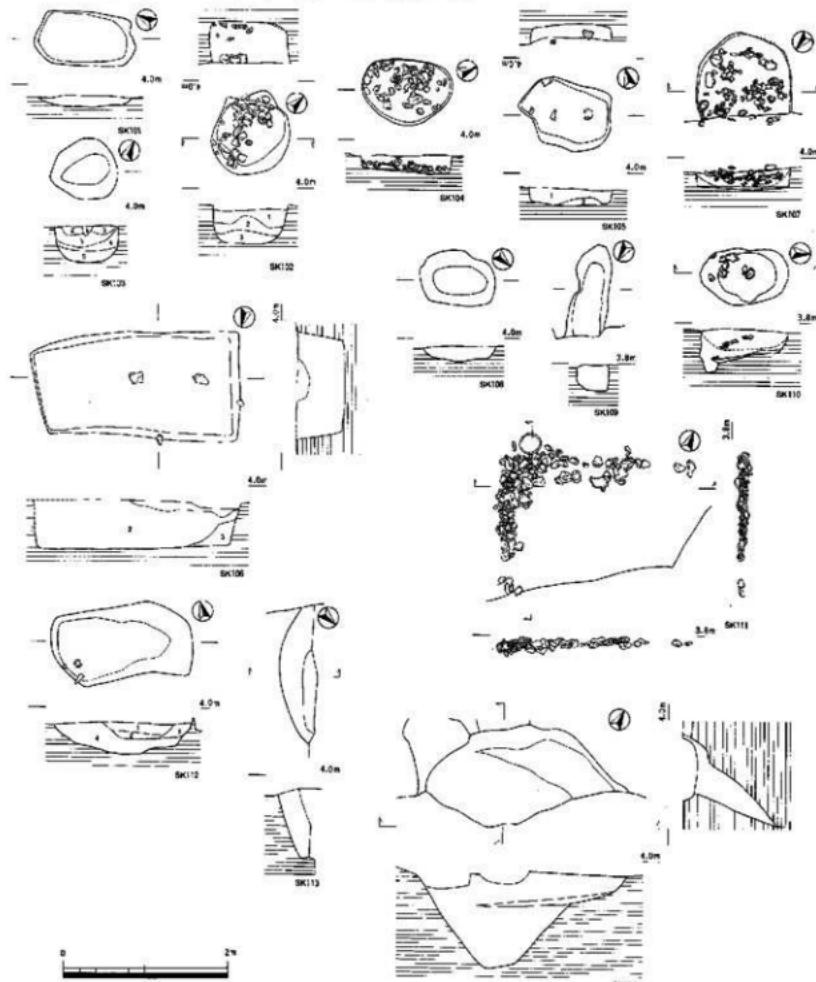


Fig. 6 第1面遺構実測図 (1/60)



Ph. 3 SK 102 (東から)



Ph. 4 SK 104 (南から)



Ph. 5 SK 106 (北から)



Ph. 6 SK 107 (南から)



Ph. 7 SK 110 (東から)



Ph. 8 SX 111 (東から)

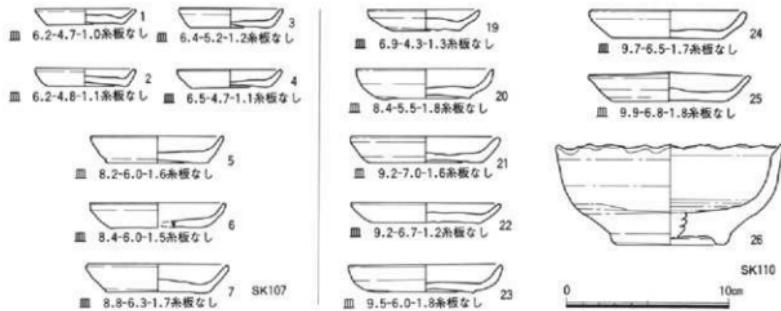
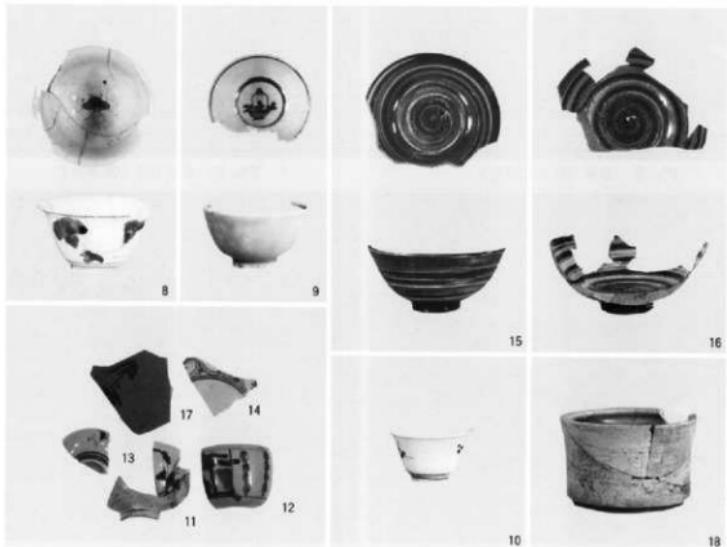


Fig. 7 第1面造構出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 9 第1面造構出土遺物 (約1/4)

### 3. 第2面の調査

第1面の下には灰褐色土と炭化物の細かい互層がみられる部分がある。この層を除去したところで第2面を設定した。灰褐色砂質土を基本とし、標高は3.5mである。北側の調査区はすべて搅乱されている。

溝1条と上坑10基を調査した。16世紀頃の遺構を検出している。一部近世の遺構があり、第1面で検出しきれなかったものと思われる。

S K201とS P2003の遺物を図示した。どちらも1面から2面に掘り下げていく途中で遺物にあたり、2面に下げて遺構を見つけだしたものである。

27・28はSK201の出土遺物である。27は明代の染付菊皿である。底部は基筒底。口径8.8cm、底径

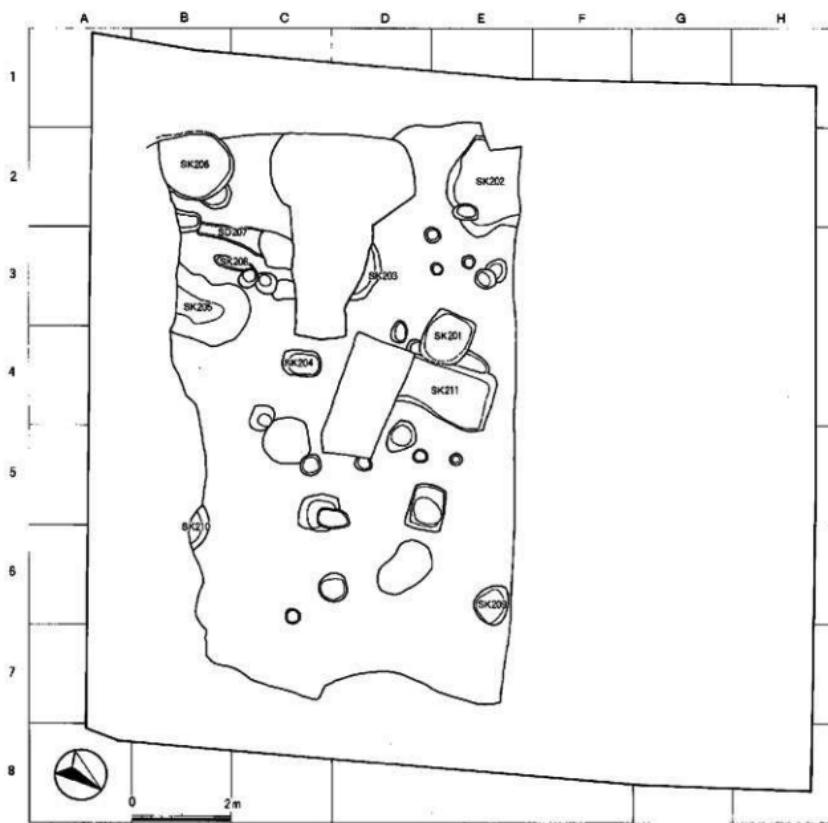


Fig. 8 第2面遺構分布図 (1/100)

4.4cm、器高1.9cm。28は青銅製の洗である。口縁を外反させ、端部を丸くおさめる。底部は若干上げ底になる。口縁部に2ヶ所穿孔がある。ひもを通して下げていたものか。外面に擦痕が無数に残る。口径40.4cm、底径25.5cm、器高6.4cm、器壁の厚さは1mm前後と薄い。

29はS P 2003出土の龍窯系青磁碗V類である。口径15.6cm、高台径5.8cm、器高9.0cm。



Ph.10 第2面南側全景（東から）

Tab. 2 第2面造構一覧

遺構番号	種類	位置	時期	造構の概要	出土書物 土師器の計測値（口径-底径-器高-底部 備考）
SK201	圓丸方形 土坑	D-E- 3-4	15~ 16C	長軸1.1m、幅約0.9m、深さ0.1m SK211を切る 覆土：暗赤褐色土、燒土多く、炭化物含む	明治付、同安窯系青磁碗、中国陶器、瓦質捲輪、土師 器環、骨壺灰、鉄滓、縫の跡口
SK202	不定形土 坑	E-2-3		底盤0.0m以上、深さ0.1m 北側地盤に切られる 覆土：1.炭化物多く含む 2.炭化物少々、炭化物含む 3.灰白色燒土質	龍泉窯系青磁碗（2-3）、同安窯系青磁碗、白磁碗、 粉青器皿、瓦質捲輪、軒丸瓦、土師器環（系切り）、 鉄滓
SK203	円形？土 坑	D-3		底盤1.2m、深さ0.2m 南側地盤トレンチに切られる 覆土：1.黃褐色砂質褐色土の混合 2.灰白色燒土質	白磁碗、高台付耳、土師器環
SK204	圓丸方形 土坑	C-4		底盤0.7m、周約0.5m、深さ0.2m 覆土：1.灰白色燒土質 2.灰白色燒土質	白磁碗灰瓶、中国陶器B群西耳杯、土師器皿、鉄滓
SK205	橢円形？ 土坑	B-C- 3-4	16C	底盤1.3m、深さ0.3m 南側地盤に切られる 覆土：1.暗赤褐色土、炭化物含む 2.暗赤褐色土質土、砂質大 3.暗赤褐色土、炭化物含む 4.灰白色燒土質 5.灰褐色土	明治付、龍泉窯系青磁碗、白磁碗灰瓶、粉青 器皿、瓦質捲輪、及、土師器環（系切り）、盆（ うつわ）、系切り）、鐵、鐵渣、鐵滓、縫の跡口 底盤 6.4-3.6-1.2 系切り板状破片なし 覆土 6.7-5.0-1.4 系切り板状破片なし 縫 7.0-4.7-1.4 系切り板状破片なし 縫 7.0-4.7-1.3 系切り板状破片なし
SK206	円形？土 坑	B-2	近鉄	直径1.3m、深さ0.2m 南側地盤に切られる 覆土：1.暗赤褐色土、炭化物少々含む 2.暗赤褐色土、灰白色土多く、炭化物含む 3.暗赤褐色土、灰白色土多く、炭化物含む 4.灰褐色土（より細い）灰白色土少量、炭化 物含む	明治付、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、白磁碗、 瓦、灰白色灰、火合、瓦質捲輪、土師器環（系切り）、 縫（系切り）、鐵滓、縫の跡口 底盤 7.0-4.4-1.5 系切り板状破片なし 覆土 7.2-4.4-1.7 系切り板状破片あり
SD207	南北溝？	B-C-3		長さ1.5m以上、幅約0.3-0.5m、深さ0.1m 北側地盤に切られる 覆土：1.黄褐色砂質土、炭化物含む	白磁碗、中国陶器、土器、瓦、土師器
SK208	長椭円形 土坑	B-C-3		長軸0.9m、短軸0.2m、深さ0.3m 覆土：1.黄褐色砂質土、炭化物多く含む	白磁碗、土師器環（系切り）
SK209	椭円形土 坑	E-6-7		長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.6m 覆土：1.黄褐色砂質土、炭化物含む 2.暗茶褐色砂質土	龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、及、中国陶器A群 盤、中国陶器各種、土師器皿、瓦、鉄滓
SK210	円形？土 坑	B-5-6		直徑1.3m以上に切られる 覆土：1.黄褐色砂質土と灰白色砂質土の混合 2.灰白色燒土質	白磁碗、瓦質捲輪、土器、土師器環、鉄滓
SK211	長方形土 坑	D-4-E- 4-5 後半	13C	長軸1.8m以上、短軸1.1m、深さ0.2m SK106、SK210に切られる 覆土：1.黄褐色砂質土、炭化物多く含む	龍泉窯系青磁碗裏盤、青白磁瓶、白磁碗、中国陶器各 種、土師器皿（系切り） 底盤 7.0-4.6-1.7 系切り板状痕痕なし 灯明皿

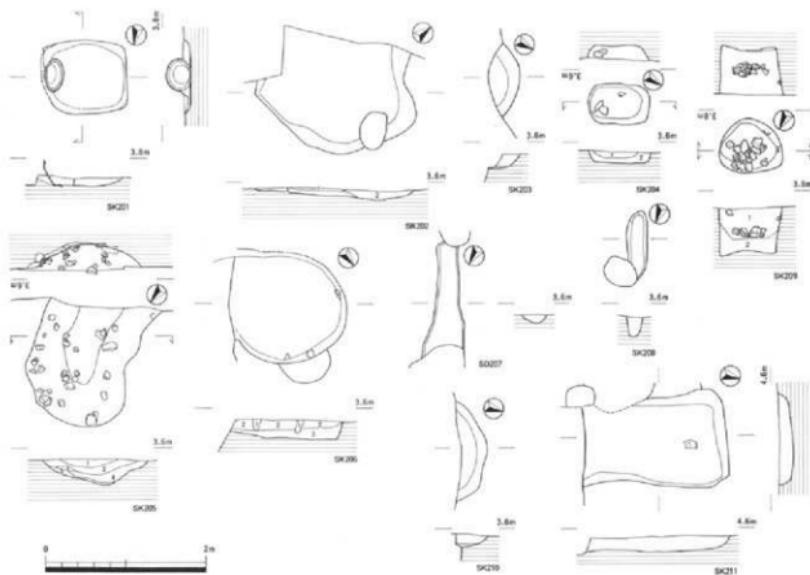


Fig. 9 第2面遺構実測図 (1/60)



Ph.11 SK201 (北から)



Ph.12 SK201 (西から)



Ph.13 SK205 (南から)



Ph.14 SK209 (南から)

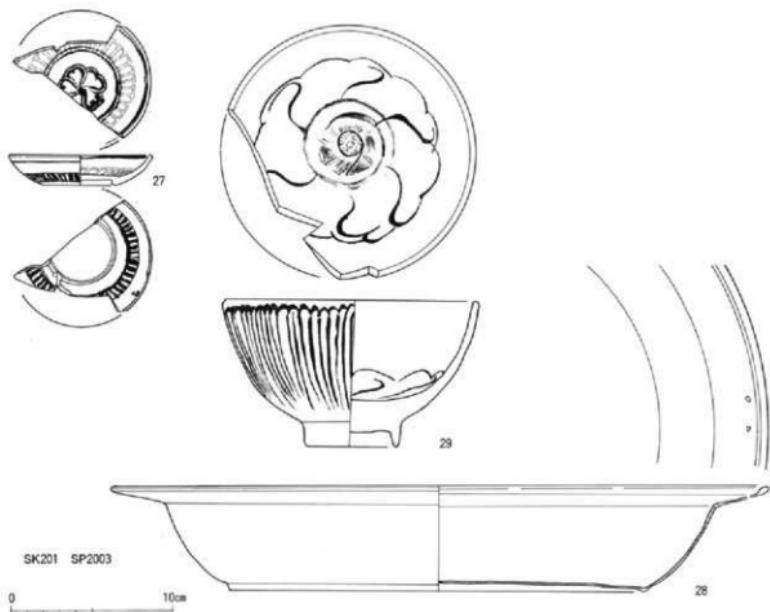


Fig.10 第2面遺構出土遺物実測図 (1/3)



Ph.15 第2面遺構出土遺物 (27: 約1/2・28: 約1/6・29: 約1/4)

#### 4. 第3面の調査

標高2.9mで設定した遺構面である。一部基盤の黄褐色砂が現れる。2面から3面に下げる途中で鉄滓の集中部がみられた。また、包含層として掘り下げた部分にも鉄滓が多量に含まれていた。井戸4基、土坑30基、遺物集中部2ヶ所を調査した。遺構は12~15世紀代である。S X302、S X303は包含層掘り下げ途中で検出した鉄滓と礫の集中部である。S K304は包含層掘り下げ途中より鉄滓と礫の集中がみられ、さらに掘り込み中にも多量の鉄滓と礫が含まれていた。S K305は円形の礫が詰まった土坑中に鉄滓が含まれていた。これらは製鉄関連の遺構と考えられる。特にS X303は鉄滓の大きな固まりが円形になっており、炉の底部であった可能性もある。井戸は、S E301とS E322は上部が擾乱されていた近世の井戸で、第3面ではじめて確認できた。また、S E307から西に向かって、硬

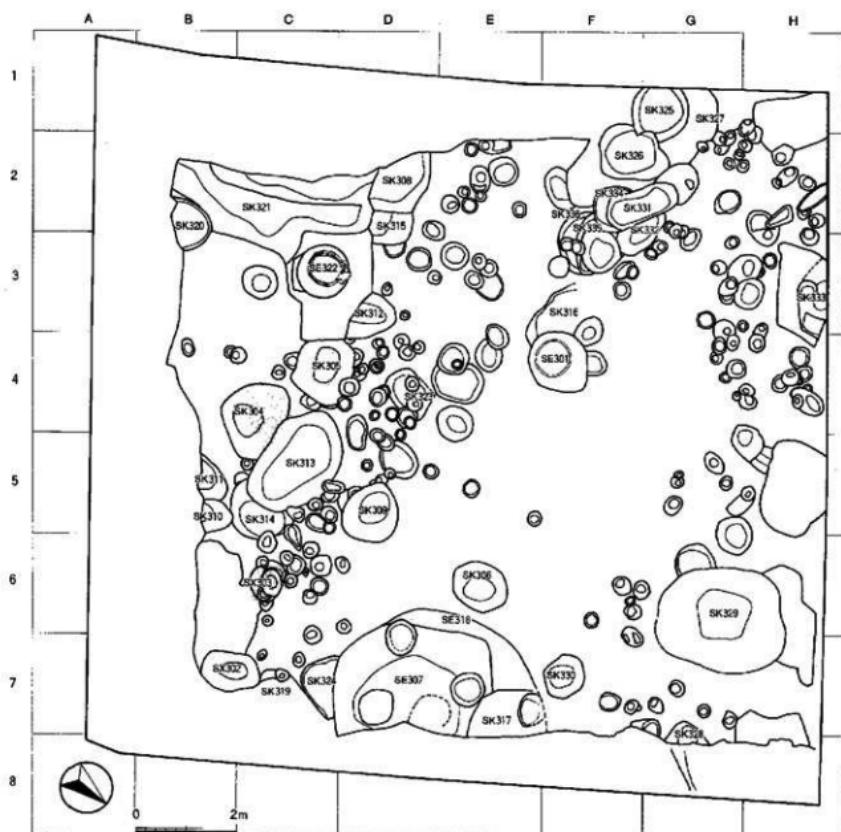


Fig.11 第3面遺構分布図 (1/100)



Ph.16 第3面南側全景（東から）



Ph.17 第3面北側全景（東から）

Tab. 3 第3面遺構一覧

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物
SE301	円形瓦組 井戸	E・F-4	近世	径1.3mの場方に瓦を径0.7mの円形に組む 深さ1.6m（標高1.3m）で掘出し、以下不明	白磁碗V型、中国唐器C群青釉仕上各様、肥前壹文・白磁組、吉津組は小田原御用、瓦、土器部品、壺の羽口
SK302	遺物集中 部	B・C-7	15C	長軸1.5m、短軸1.0mに繩、鉄滓が集中	馬糞竹、堅木空木舟荷輪V型、西付付皿、墨、阿波燒 骨組皿、白磁組・N・V型、水注、瓦等、中国陶器 各種、油壺深腹、瓦、瓦蓋鉢、土器、土器破壊（余 切り）、壺（赤切り）、縁の羽口
SK303	遺物集中	C-6	15C	長軸2.2m、短軸0.9mに繩、鉄滓が集中	五彩、铁滓
SK304	南北系土 坑	B・C- 4・5	15C	長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.9m 繩、鉄滓が多量に出土 SK313Cに切られる 壁土1：灰褐色土 2：灰褐色土 3：灰褐色土 4：灰褐色土 5：灰褐色土 6：灰褐色土 7：灰褐色土 8：灰褐色土 9：灰褐色土 10：灰褐色土 11：灰褐色土 12：灰褐色土+黄褐色砂 13：黄褐色土	鹿児島系青磁碗V-3、阿波窯系青磁碗、白磁瓦、 V・VI型、日、中国陶器A群等、中國陶器各様、 白磁組、吉津組、白磁組・N・V型、水注、瓦等、 中国陶器各種、油壺深腹、瓦、瓦蓋鉢、土器、土器破壊（余 切り）、壺（赤切り）、縁の羽口 III 6.8-5.2-1.4 余切り板状瓦痕なし
SK305	南北系 坑	C・D-4		長軸1.3m以上、短軸1.1m、深さ0.9m 繩、鉄滓が多量 に出土 西記述圖トレンチに切られる	白磁碗V型、中国陶器、瓦器類、瓦、土器、土器部品 (赤切り)、青石製石器
SK306	南北系 坑	E-6	12C 後半	長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.2m 壁土：灰褐色土、灰化物、焼土含む	鹿児島系青磁碗I-5、I型、阿波窯系青磁碗、白 磁瓦、中国陶器各種、土器四合（赤切り）、瓦 (赤切り)、瓦
SE307	円形井戸	C-7-B- E-6・7	14C	径1.2m以上の円形の場方に径0.7mの円形の井筒を挿する 井筒は木質を残すのみ 井筒挖堀に切られる SK317、SE318、SK324を切る 壁土：茶褐色砂質土	鹿児島系青磁碗I-5、I型、瓦、白磁、大皿、小鉢 等、阿波窯系青磁碗、墨、壺、白磁碗II、墨、瓦、 V・V型、区隔、平底瓦円筒、水注、青白磁碗、 合子蓋、磁州窑系青白瓷、中國陶器C群青釉仕上各 様、油壺深腹、瓦等、瓦蓋鉢、瓦、瓦蓋鉢、土器、 土器部品、土器破壊（赤切り）、壺（赤切り）、滑石製石器、 鐵、鐵斧、鐵鎌
SK308	不定形土 坑	D-2	12C 後半	径1.6m以上、深さ0.6m SK311、SK312を切る 壁土1：黄褐色土 2：黄褐色土 3：灰褐色土 4：黄褐色土	鹿児島系青磁碗I-1、阿波窯系青磁碗、瓦、白磁碗 等、瓦、瓦蓋、中國陶器A群等、中國陶器各様、瓦 等、壺、瓦、石碗、土器部品、壺、瓦（赤切り）、壺 (赤切り)



SK324	円形?土 灰	C・D-7 後半	12C 後半	径1.00m以上、厚さ0.9m以上 SK327に切られる	聖泉系青磁鏡工型、白陶器I型、中国陶器各種、 綠釉陶器片、十脚杯环(系切り)、滑石製石器 等、II-2-8-3-2-8 糸切り灰枕灰瓦あり	
SK325	円形土瓶 F-G- I-Z	後半	12C 後半	径1.1m、厚さ0.3m SK326を切る 1: 黄褐色土、灰化物含む 2: 黄褐色土	聖泉系青磁鏡工型、同安窯系青磁鏡、中国陶器、上 海器片(系切り)	
SK326	円筒形上 灰	F-G- I-Z	12C 後半	径1.5m、厚さ0.8m SK325に切られる 復土: 1: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 2: 黄褐色土、少し黄色っぽい、灰化物、灰土、灰褐色 色點斑点含む 3: 黄褐色土、灰化物、灰土、灰褐色含む 4: 黄褐色土、灰化物、灰土、灰褐色含む 5: 黄褐色土、灰化物、灰土、灰褐色含む 6: 黄褐色土、粘性あり、灰化物含む 7: 黄褐色土 8: 黄褐色土、灰土含む 9: 黄褐色土 10: 黄褐色土+黄褐色 11: 黄褐色土 12: 黄褐色土+灰褐色的質土 13: 黄褐色土+灰褐色的質土 14: 黄褐色土+灰褐色的質土 15: 黄褐色土、粘性あり、灰化物含む	聖泉系青磁鏡工型、II-1-2型、白陶器I型、質 灰、灰瓦、中国陶器灰陶瓶、C型怪錠、壁か各種、 瓦、上部器片(系切り)、缸(系切り)	
SK327	円形?土 灰	G-H-1 G-H-2-8 前半	12C 後半	径0.9m以上、厚さ0.3m 機械に切られる	白陶器I型、瓦、瓦器、中国陶器灰陶瓶、C型怪錠、瓦 器片、瓦、土瓶器片 灰: 16.6-12-2-2-6 糸切り板状灰瓦あり	
SK328	椭円形? 土瓶		12C 後半	径0.9m以上、厚さ0.9m 機械に切られる	聖泉系青磁鏡工型、I-5、5-6、6-8型、同安窯系青 磁鏡工型、土瓶器片 復土: 1: 黄褐色土、灰化物含む 2: 黄褐色土、灰化物含む 3: 黄褐色土、灰化物含む 4: 黄褐色土、灰化物含む 5: 黄褐色土、灰化物含む 6: 黄褐色土、灰化物含む	聖泉系青磁鏡工型、I-5、5-6、6-8型、同安 窯系青磁鏡工型、II型、頂板灰、瓦器、瓦、土瓶器片 C型怪錠、瓦、如意雲頭、瓦瓶、土瓶器、土瓶器环(系 切り)、瓦(系切り)、滑石製石器
SK329	椭円形土 灰	G-H- G-H-7	12C 後半	径1.3m、厚さ1.0m、高さ1.1m 機械に切られる	聖泉系青磁鏡工型、I-1、5型、瓦、瓦、土 瓶器片 復土: 1: 黄褐色土、灰化物含む 2: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 3: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 4: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 5: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 6: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 7: 黄褐色土、5cmより短い灰化物、灰土含む 8: 黄褐色土、灰化物、灰土、黃褐色砂含む 9: 黄褐色土、灰化物、灰土含む 10: 黄褐色土、灰化物、灰褐色砂含む 11: 黄褐色土 12: 黄褐色砂質土、灰化物、黃褐色砂含む 13: 黄褐色砂質土、灰化物含む 14: 黄褐色砂質土、灰化物含む 15: 黄褐色砂質土、灰化物、灰土含む 16: 黄褐色砂質土、灰褐色砂質土含む 17: 黄褐色砂質土 18: 黄褐色砂質土 19: 黄褐色砂質土、暗褐色土含む 20: 黄褐色砂質土 21: 黄褐色砂質土、暗褐色土含む 22: 黄褐色砂 23: 黄褐色砂質土+灰褐色砂 24: 黄褐色砂質土 25: 黄褐色砂質土 26: 黄褐色砂質土、灰化物含む	聖泉系青磁鏡工型、I-1、5型、瓦、瓦、土 瓶器片 C型怪錠、瓦、如意雲頭、瓦瓶、土瓶器、土瓶器环(系 切り)、滑石製石器、青石、瓦片
SK330	円底土瓶 F-7		13C 前半	径0.9m、厚さ0.8m 復土: 1: 黄褐色土、灰化物含む 2: 黄褐色土	聖泉系青磁鏡工型、II型、同安窯系青磁鏡工型 白陶器I型、中国陶器各種、復土灰器、瓦、土瓶器 片(系切り)、瓦(系切り)、滑石製石器、灰瓦 灰: 8.0-6.2-1.1 糸切り板状灰瓦あり	
SK331	椭円形上 灰	F-G-2		長軸1.7m、短軸0.6m、厚さ0.3m SK332、SK334を切る	青瓷片、青白瓷瓶、白磁瓶V-V-2瓶、瓦、中国陶 器、二脚杯环	
SK332	椭円形上 灰	F-G- 2-3	12C 前半	長軸1.7m、短軸0.6m、厚さ0.3m SK331に切られる 復土: 黄褐色土、灰土、灰化物含む	白磁瓶I型、V-V-2瓶、中国陶器、復土灰器、土瓶 器片(系切り)、瓦(系切り)、滑石製石器	
SK333	円形?土 灰	H-3-4	12C 後半	径0.8m以上、厚さ0.7m 瓦面に段がある 復土: 黄褐色土	復泉窯系青磁鏡工型、II-6型、同安窯系青磁鏡、白磁鏡片 V、引領、瓦、瓦、中国陶器瓦瓶灰瓦器、瓦瓶 瓦片、土瓶器片(系切り)、瓦(系切り)、灰瓦	
SK334	円形土瓶 F-2			径0.9m、厚さ0.4m SK331に切られる 復土: 黄褐色土	白磁瓶、瓦器片、土瓶器片	
SK335	小形上 灰	F-2-3	12C 後半	径0.9-1.2m、厚さ0.5m SK334に切られる 復土: 黄褐色土	同安窯系青磁鏡、白磁鏡I型、V型、中國陶器各種、復 土灰器、土瓶器片	
SK336	刃形?土 灰	F-2-3		径1.3m、厚さ0.6m SK335に切られる 復土: 黄褐色土	土瓶器片	

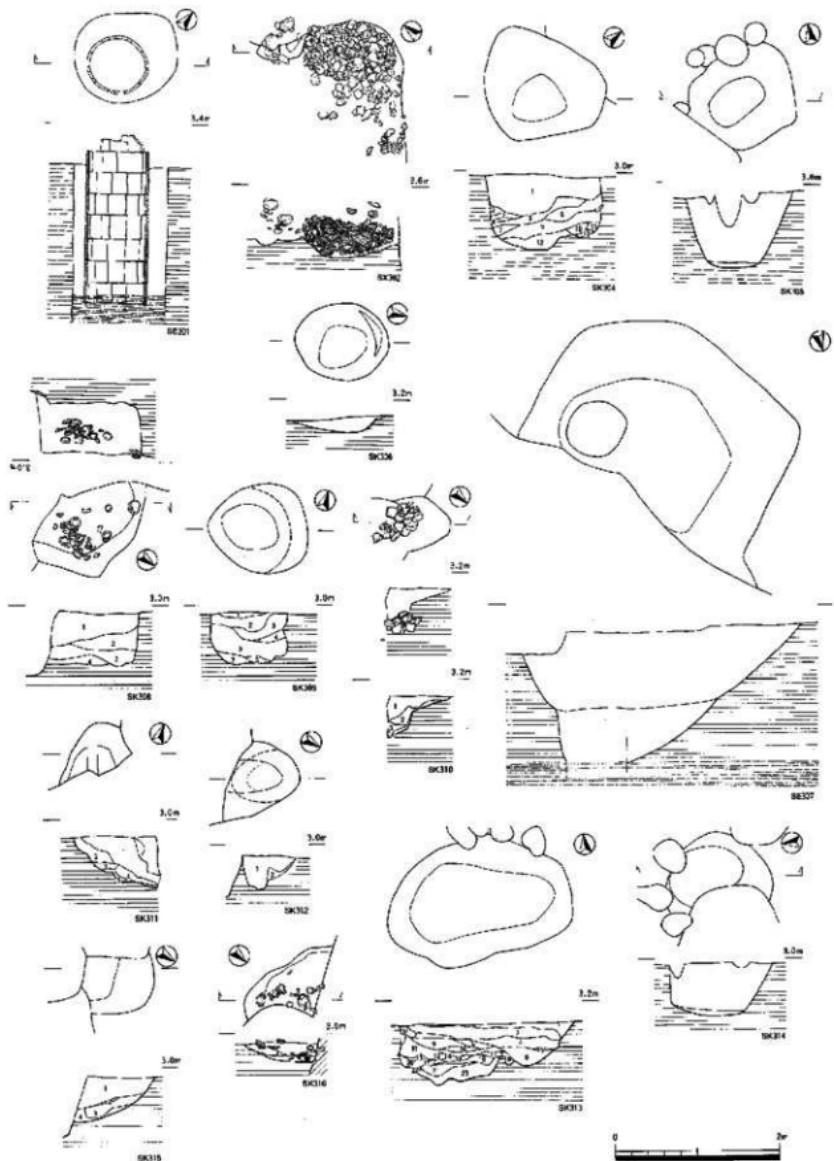


Fig.12 第3面造構実測図 1 (1/60)

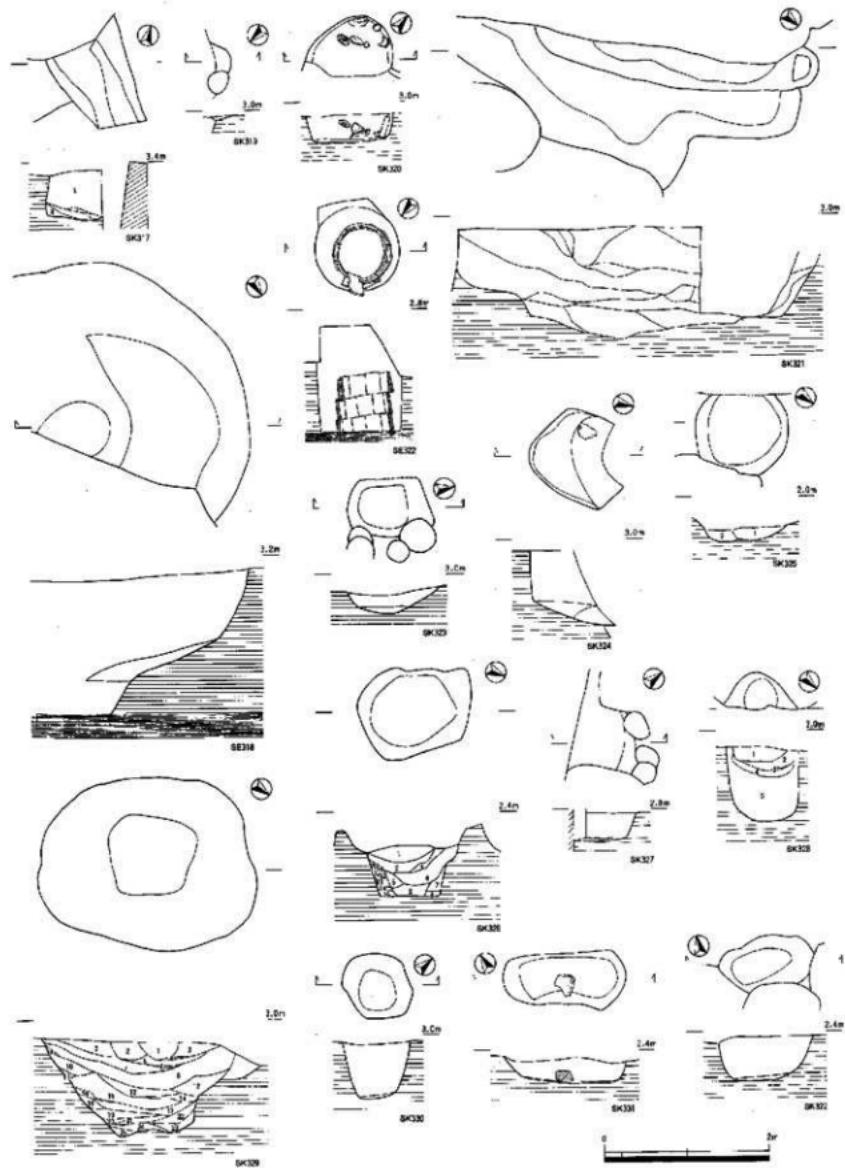


Fig.13 第3面造構実測図 2 (1/60)

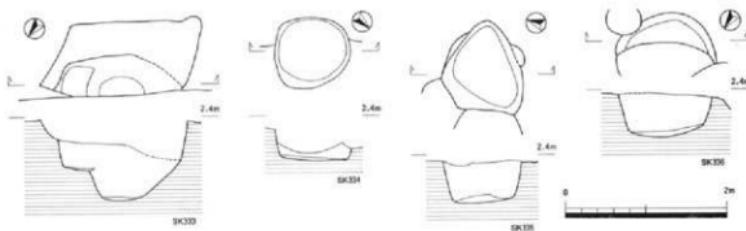
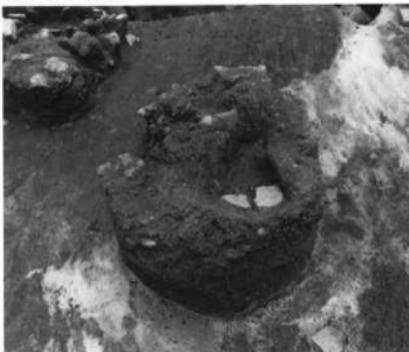


Fig.14 第3面遺構実測図3 (1/60)



Ph.18 S X 302 (東から)



Ph.19 S X 303 (北から)



Ph.20 S K 304 (北から)



Ph.21 S E 307 (東から)



Ph.22 SK 308 (東から)



Ph.23 SK 314 (西から)



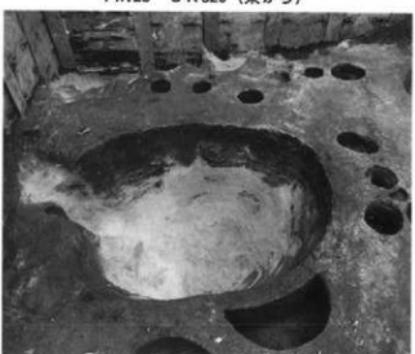
Ph.24 SK 316 (西から)



Ph.25 SK 320 (東から)



Ph.26 SK 326 (東から)



Ph.27 SK 329 (西から)

化面がみられ、遺構も少なかった。道路か。

S K 308、S K 314、S K 316、S K 320、S K 326、S K 329の遺物を図示した。30~56はS K 308出土上の土師器の壺と皿である。すべて底部糸切りである。30~44は皿である。平均口径8.2cm、底径6.2cm、器高1.3cm。45~56は壺である。55と56はやや大型である。この2点を除くと平均口径12.5cm、底径8.0cm、器高2.9cmである。

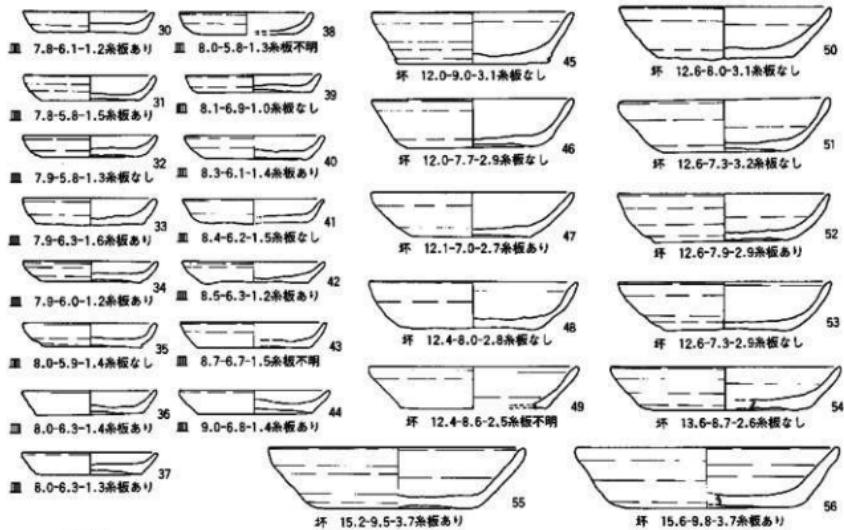
57~61はS K 314出土の土師器で、すべて底部糸切りである。57は皿である。58~61は壺である。平均口径12.3cm、底径8.3cm、器高2.3cmである。

62~73はS K 316の出土遺物である。62・63は土師器の皿である。どちらも底部糸切りである。64~72は土師器の壺である。すべて底部糸切りである。平均口径12.6cm、底径8.2cm、器高2.6cmである。73は同安窯系青磁碗である。高台径5.6cm。

74~78はS K 320の出土遺物である。74・75は粉青沙器の皿である。それぞれ口径15.2cm、15.2cm、高台径6.2cm、6.1cm、器高3.0cm、3.5cmである。76は土師器の鉢である。高い高台を付ける。復元口径23.0cm、高台径14.0cm、器高9.1cm。77は土師器の皿である。口縁部は内側に折り曲げ、底部には三足をつけるが一脚は欠損している。口径8.8cm、最大径10.3cm、器高4.7cm。78は丸瓦である。外側に繩目、内側に布目と爪形の圧痕が残る。図示したものはか粉青沙器の瓶も出土している。15世紀前半の遺物を中心とする。

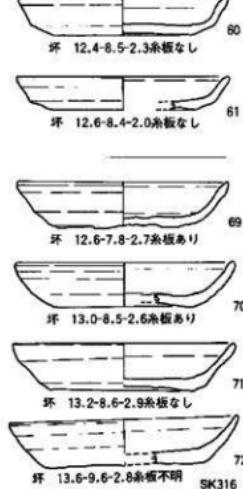
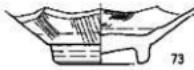
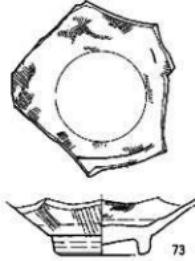
79~85はS K 326の出土遺物である。79は土師器の皿である。80は同安窯系青磁碗で明るい青白色の透明釉がかかる。下半部露胎。口縁部を外側に折り曲げる。外底は粗く削り出されたままである。復元口径18.7cm、高台径5.4cm、器高7.9cm。81は高麗青磁の碗である。全面施釉され、疊付部分の釉は拭き取られている。高台径4.2cm。82は龍泉窯系青磁皿で片切形の魚文を描く1~2類である。底径3.5cm。83・84は白磁碗IX類である。内底は釉を輪状に搔き取っている。それぞれ復元口径17.6cm、17.4cm、高台径7.0cm、7.3cm、器高5.4cm、5.8cmを測る。85は陶器の碗である。復元口径10.6cm、器高5.6cm、底径5.3cm。唐津の製品のようで、混入と思われる。12世紀後半の遺物が中心である。

86~108はS K 329の出土遺物である。86は土師器の壺である。87・88は龍泉窯系青磁碗で、内面に蓮花折枝文を施す1~5類である。高台径はそれぞれ5.9cm、6.2cm。89~94は同安窯系青磁碗II類である。94は無文で見込みの釉を輪状に搔き取る。89は復元口径16.0cm、高台径5.2cm、器高7.0cm。90は復元口径15.7cm、高台径5.1cm、器高6.3cm。91は高台径5.2cm、92は高台径5.4cm、93は高台径、94は高台径5.4cm。95は越州窯系青磁碗である。全面に施釉されている。疊付に砂目が付着している。高台径8.3cm。96・97は龍泉窯系青磁皿である。底径はそれぞれ4.2cm、4.0cm。98は同安窯系青磁皿である。復元口径10.6cm、底径5.2cm、器高1.9cm。99は白磁碗VII~1類である。外底に「謝六」銘墨書がある。高台径6.4cm。100は白磁碗II~1類である。内底の釉を輪状に搔き取る。高台径7.1cm。101は白磁碗II~2類である。内底の釉を輪状に搔き取る。高台径6.0cm。102は白磁碗IV~1類である。復元口径15.5cm、高台径7.0cm、器高5.6cm。103は白磁碗IX類である。内底の釉を輪状に搔き取る。高台径7.1cm。104は白磁平底皿である。復元口径10.6cm、底径4.3cm、器高2.3cm。105は白磁高台付皿である。内底の釉を輪状に搔き取る。復元口径9.0cm、高台径4.2cm、器高2.2cm。106は青白磁合子身である。口径5.4cm、受部径6.1cm、底径4.2cm、器高2.3cm。107は天日茶碗である。中国製である。復元口径12.6cm、高台径4.1cm、器高5.8cm。108は中国陶器の盤である。口縁部の釉を拭き取る。復元口径22.8cm、底径19.0cm、器高16.6cm。12世紀後半の遺物が中心である。



SK308

SK314



0 10cm

Fig.15 第3面遺構出土遺物実測図1 (1/3)

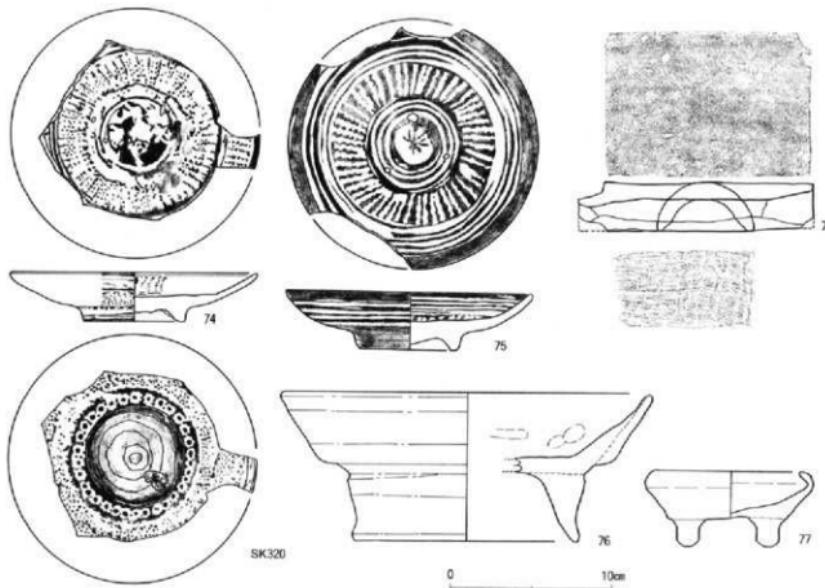
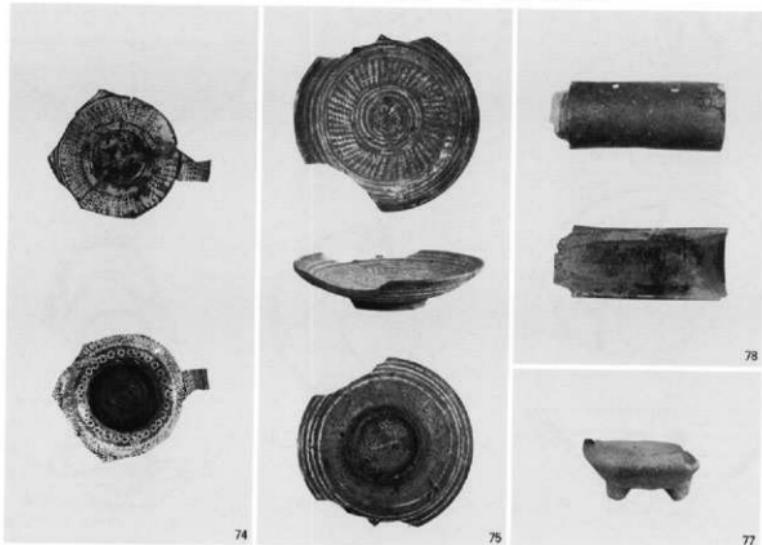


Fig.16 第3面遺構出土遺物実測図 2 (78:1/6・他:1/3)



Ph.28 第3面遺構出土遺物 (78:約1/8・他:約1/4)

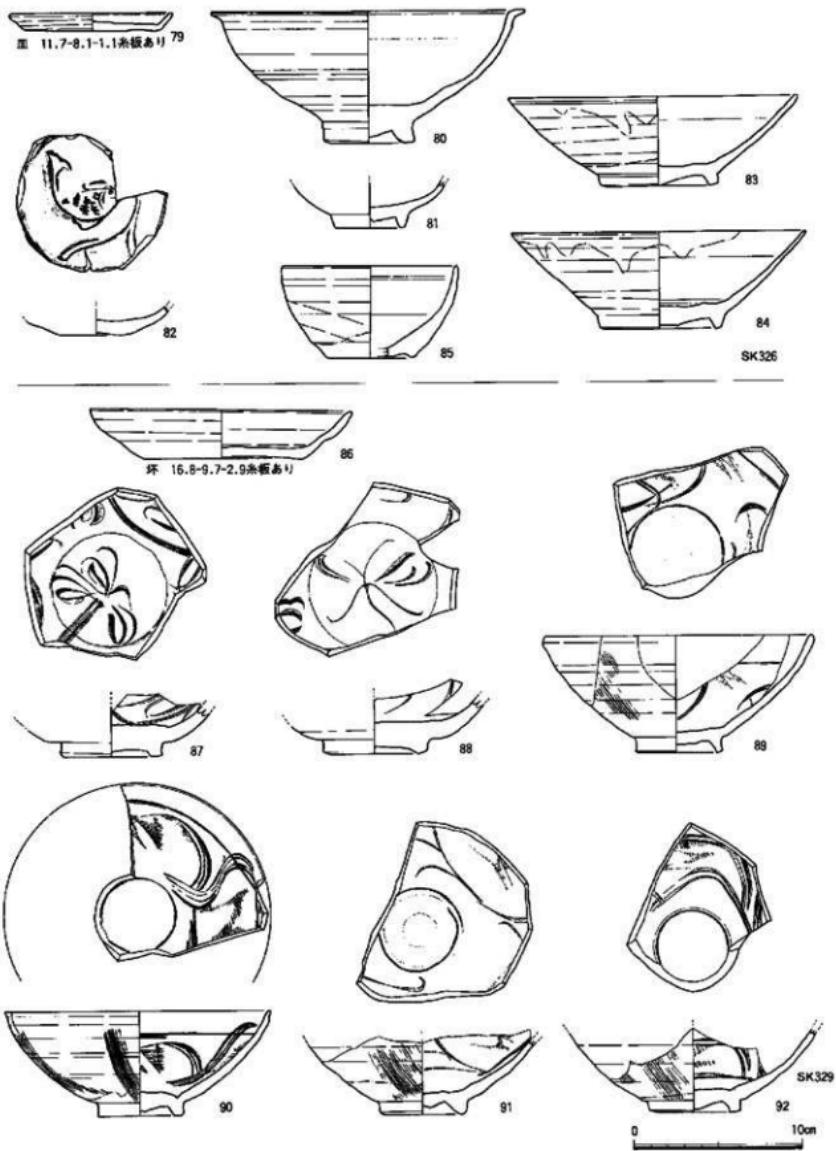


Fig.17 第3面造構出土遺物実測図 3 (1/3)

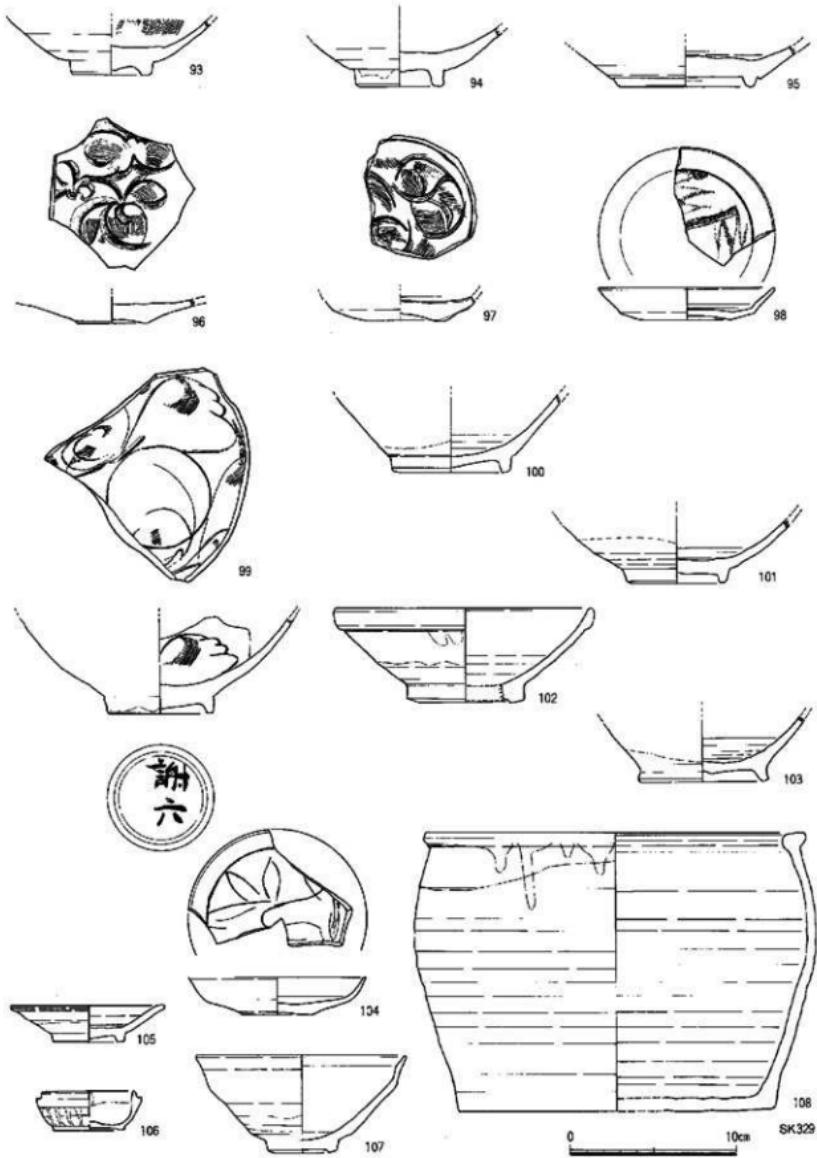


Fig. 18 第3面造構出土遺物実測図 4 (1/3)

## 5. 第4面の調査

基盤の黄褐色砂で第4面を設定した。標高は2.3~2.9mで緩やかに北側に傾斜している。第3面とレベル差がないので、3面4面で時期が逆転しているものもあると思われる。12世紀代の遺構が主である。

井戸2基と土坑42基を調査した。

S K406、S K415、S K425、S K439の遺物を提示した。

109~111はS K406の出土遺物である。109は上部器の椀である。口径15.9cm、高台径6.6cm、器高5.9cm。110は白磁碗IV-1類である。口径16.3cm、高台径7.0cm、器高6.9cm。111は白磁の水注である。頸部を欠く。剣部径16.4cm、底径7.3cm。

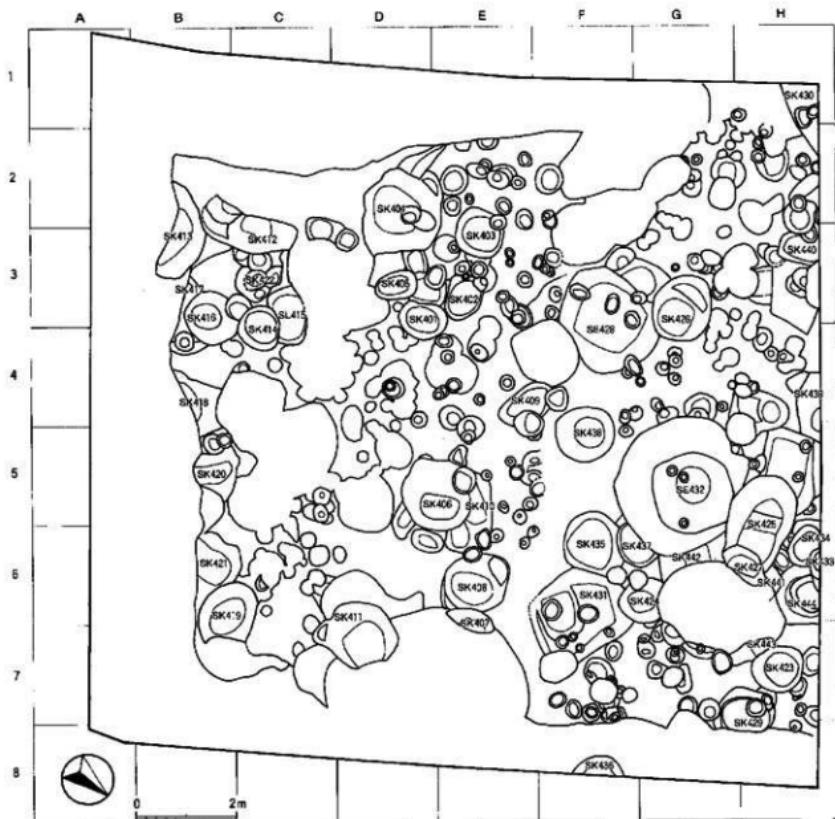


Fig.19 第4面遺構分布図 (1/100)



Ph.29 第4面南側全景（東から）



Ph.30 第4面北側全景（東から）

Tab. 4 第4面遺構一覧

遺構番号	種類	位置	時期	遺構の概要	出土遺物 土器器形測定 (口径-底径-高さ 底部 備考)
SK401	格円形土坑	D-E-3+4	12C	直径1.6m、幅約0.5m、深さ0.2m 壁土：暗赤褐色砂質土、灰化物、鐵土含む	白磁碗 E-N-V類、領寒器窓、瓦、瓦羽輪、土器器 身台付杯、环
SK402	格円形土坑	E-3		直径0.9m、幅約0.7m、深さ0.3m 壁土： 1. 暗褐色砂質土、暗赤褐色砂質土含む 2. 暗褐色砂質土、黑色土含む 3. 黑色土、灰褐色砂質土含む 4. 黑色土、灰褐色砂質土含む 5. 灰褐色土 6. 灰褐色土 7. 灰褐色土、黃褐色砂質土含む 8. 灰褐色土 9. 黃褐色砂質土、灰褐色土含む 10. 黄褐色砂質土 11. 黄褐色砂質土	白磁盤、中国陶器片、土器器环
SK403	円形土坑	E-2+3		直径1.0m、深さ0.3m 壁土： 1. 暗赤褐色砂質土、黃褐色砂質土 2. 暗褐色砂質土、黃褐色砂質土少量含む 3. 暗褐色砂質土、黃褐色砂質土少量含む 4. 灰褐色砂質土 5. 黄褐色砂質土、黃褐色砂質土含む 6. 黄褐色砂質土、黃褐色砂質土含む 7. 黄褐色砂質土	領寒器窓、土器器高台付杯、环(ヘラ切り)・盤(ヘラ ラ切り・外切り) 盤 9.0-7.4-1.0 ヘラ切り板状庄底あり
SK404	円形土坑	D-E-2+3	11C	直径1.7m、深さ1.5m 壁土： 1. 暗褐色砂質土 2. 暗褐色砂質土、1層より明るい 3. 暗褐色砂質土 4. 灰褐色砂質土、3層より明るい、暗褐色砂質土含む 5. 黄褐色砂質土、暗褐色砂質土含む 6. 黄褐色砂質土 7. 黄褐色砂質土 8. 黄褐色砂質土、鉄分による変色 9. 黄褐色砂質土、暗褐色砂質土含む 10. 灰褐色砂質土 11. 黄褐色砂質土、鉄分による変色 12. 黄褐色砂質土、鉄分による変色 13. 黄褐色砂質土 14. 黄褐色砂質土 15. 黄褐色砂質土、鉄分による変色 16. 黄褐色砂質土 17. 黄褐色砂質土 18. 黄褐色砂質土	越州窑系青瓷碗、龍泉窑系青瓷碗(蓋なし)、白磁碗N-V類、綠釉陶片、領寒器窓、瓦、瓦羽輪、瓦、土器 器身台付杯、环(ヘラ切り)・盤(ヘラ切り)・盆(ヘラ ラ切り)・外切り 瓦底杯 14.8-13.1 ヘラ切り板状庄底あり
SK405	格円形土坑	D-3	12C	直径0.9m、幅約0.5m、深さ0.4m 壁土：暗赤褐色土	龍泉窑系青瓷皿、白磁碗青白、中国陶器、領寒器窓 瓦底杯、土器、土器器身(系切り)・盤(系切り)

SK406	円形土塊	D・E-5・6	12C 前半	径1.40m、深さ0.6m SK406に切られる。	越後系赤色骨質、鹿島系青色骨質0種、白磁器Ⅱ・Ⅳ、白磁、墨、水注、須恵器類、東播磨系淡色骨器、瓦器類、上野器類(未発見)
SK407	円形?土塊	E-6・7		径1.00m以上、深さ0.6m以上 SK407各可視部に記載。	白磁器、淡色器片、上野器片
SK408	椭円形土塊	E-6	12C 後半	長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.4m SK408に切られる。 土質上:	片口器、白磁器Ⅳ・V・VI類、墨、中國陶器、須恵器類、瓦器類、移動式窓、十輪器高持付耳、环(未切り)、土
SK409	圓形土塊	E-4・5	12C 前半	長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.3m SK409に切られる。	片口器、白磁器Ⅳ・V・VI類、墨、中國陶器、須恵器類、瓦器類、移動式窓、十輪器高持付耳、环(未切り)、土
SK410	椭円形土塊	E-5・6	12C 後半	長軸1.6m以上、幅約0.9m以上、深さ0.3m SK410に切られる。	同安窯系青白釉、白磁器Ⅳ・V類、墨、中国陶器、瓦器類
SK411	不定形土塊	C・D-6・7	12C 前半	長軸1.7m以上、短軸1.0m以上、深さ1.0m SK411・SK424に切られる。	白磁器Ⅳ類、墨、片口器、中國陶器C種銀灰、上野器半(ヘタリ)、墨(未発見)
SK412	不定形土塊	B・C-2・3	12C 後半	長軸2.0m、短軸0.7m以上、深さ0.9m SK412に切られる。	同安窯系青白釉(墨)、白磁器瓦器類、須恵器類、十輪器环(未切り)、墨(未発見)
SK413	圓形?土塊	B-2・3		径1.00m以上、深さ0.6m 地図標識区外で発見される。SK412に切られる。	白磁器、淡色器片、瓦、上野器皿(未切り)
SK414	圓形土塊	C-3・4	15C	径1.9m、深さ0.5m SK416に切られる。	同安窯系青白釉、白磁器Ⅳ・V類、中國陶器、須恵器類、移動式窓、十輪器、上野器半、墨
SK415	椭円形土塊	C-3・4	15C	長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.4m 化粧刷毛手彫りで装飾される。SK414に切られる。	同安窯系青白釉、白磁器Ⅳ類、別物器形瓦器、編首小虫、上鏡、土師器指揮、环(ヘタリ)
SK416	圓形土塊	B・C-3・4	12C 後半	径1.1m、深さ0.5m SK414に切られる。SK417を切る。	鹿島系青白釉、白磁器、中國陶器、須恵器片、上鏡、土師器环、墨(未切り)、鶴の羽口
SK417	椭円形?土塊	B-3・4		長軸1.6m以上、短軸0.7m以上、深さ0.3m 瓦器類に切られる。SK416に切られる。	墨 7.4-6.2-1.2 环(未切り)板状灰陶器あり 墨 7.5-3.1-1.6 环(未切り)板状灰陶器あり
SK418	不定形土塊	B-4・5		径1.4m、深さ0.20m 瓦器類に切られる。SK304に切られる。	白磁器瓦器、瓦器類、A、土鏡
SK419	椭円形土塊	B・C-6・7	12C 後半	長軸1.5m以上、短軸1.0m、深さ0.4m 瓦器類に切られる。SK303に切られる。SK421を切る。	青白釉、白磁器、V類、中國陶器A群青釉、軒丸瓦、瓦器類、墨、A、土師器环、墨(ヘタリ)、鶴の羽口
SK420	圓形?土塊	B・C-5		長軸1.00m以上、短軸0.6m、深さ0.3m 瓦器類に切られる。SK303に切られる。	墨 8.0-6.3-1.2 环(未切り)板状灰陶器なし 墨 9.0-6.0-2.2 环(未切り)板状灰陶器なし
SK421	圓形?土塊	B・C-6	12C 前半	径1.5m以上、深さ0.5m 瓦器類に切られる。SK303に切られる。	白磁器N・V類、墨、中國陶器、滑石器片、土師器不(未切り)、滑石器片
SK422	圓形土塊	C-3	12C 後半	径1.00m、深さ0.4m ビードに底部から下まで切られる。	同安窯系青白釉、白磁器瓦器、瓦器類、須恵器片、上野器半(未切り)



SK438	円形土坑	F-4・5	12C 前半	径1.2m、深さ0.4m 壁上：黒褐色土、地上、炭化物含む 2：暗灰褐色土、炭化物含む 3：暗黃褐色砂 4：暗灰褐色土、炭化物含む 5：暗灰褐色土、炭化物含む 6：暗灰褐色土、炭化物含む	白陶器II・IV・V、罐類・瓦、中田陶器、復原器皿、瓦器等、土器器环(余切り)、瓦青
SK439	椭円形？ 土坑	H-4・5		長軸1.4m、短軸1.0m以上、深さ0.9m 北側斜面外へ伸びる 壁上：暗灰褐色土	白陶器II・I型、中田陶器、瓦、土器器环(余切り)・瓦(余切り)、瓦、瓦青 底 9.2-6.0-1.7 系切り鉢状圧痕なし
SK440	椭円形？ 土坑	H-3	12C 後半	長軸1.0m以上、短軸0.8m以上m、深さ0.5m 北側斜面外へ伸びる	鹿名窯系青白釉I-1-5型・瓦、白陶器II型・瓦、中田陶器、土器器环(余切り)
SK441	円形？北 土坑	H-6	12C 前半	径1.3m前後、深さ0.6m SK329、SK425、SK427、SE432に切られる	白陶器IV・瓦類・水注、中田陶器、土器器环・瓦
SK442	円形？北 土坑	G-6		径1.5m以上、深さ0.7m SK329、SK425、SK427、SE432に切られる	白陶器、中田陶器
SK443	椭円形？ 土坑	G・H-7	15C	径1.1m以上、深さ0.6m SK329、SK425に切られる 壁上：暗褐色土、焼土、炭化物含む	同安窯系青白釉、白磁江漬、荷輪擴鉢、復原器皿、瓦、土器器片
SK444	円形？土 坑	H-6・7	12C 前半	径1.2m、深さ0.8m 北側斜面外へ伸びる。SK329、SK433、SK441に切られる	白陶器II・IV型・瓦、中田陶器A群物はか各型、須恵器、瓦器等、土器器环(余切り)・瓦(ヘラ切り)、瓦 底 9.4-7.2-1.1 ヘラ切り板状压痕不明



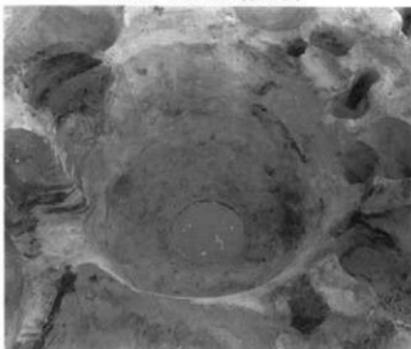
Ph.31 SK 406 (東から)



Ph.32 SK 425 (北から)



Ph.33 SE 428 (南から)



Ph.34 SE 432 (北から)

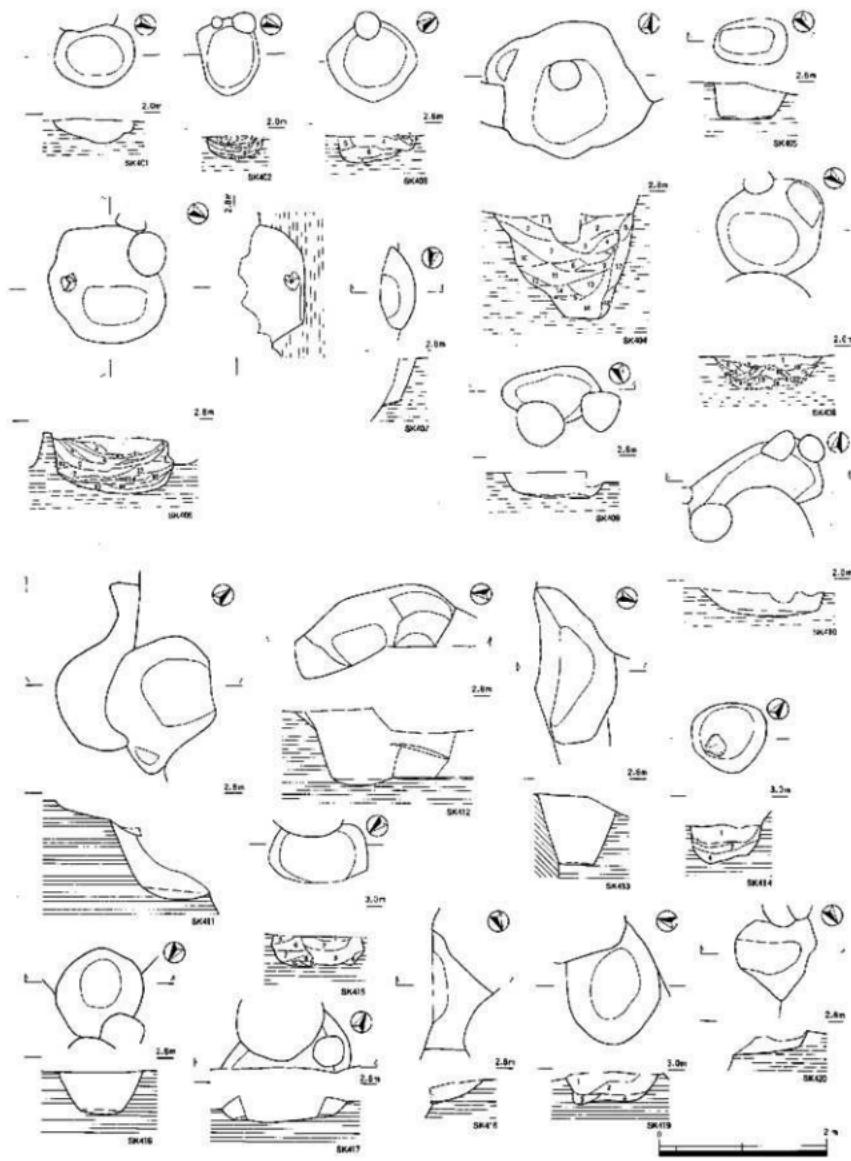


Fig.20 第4面造構実測図1 (1/60)

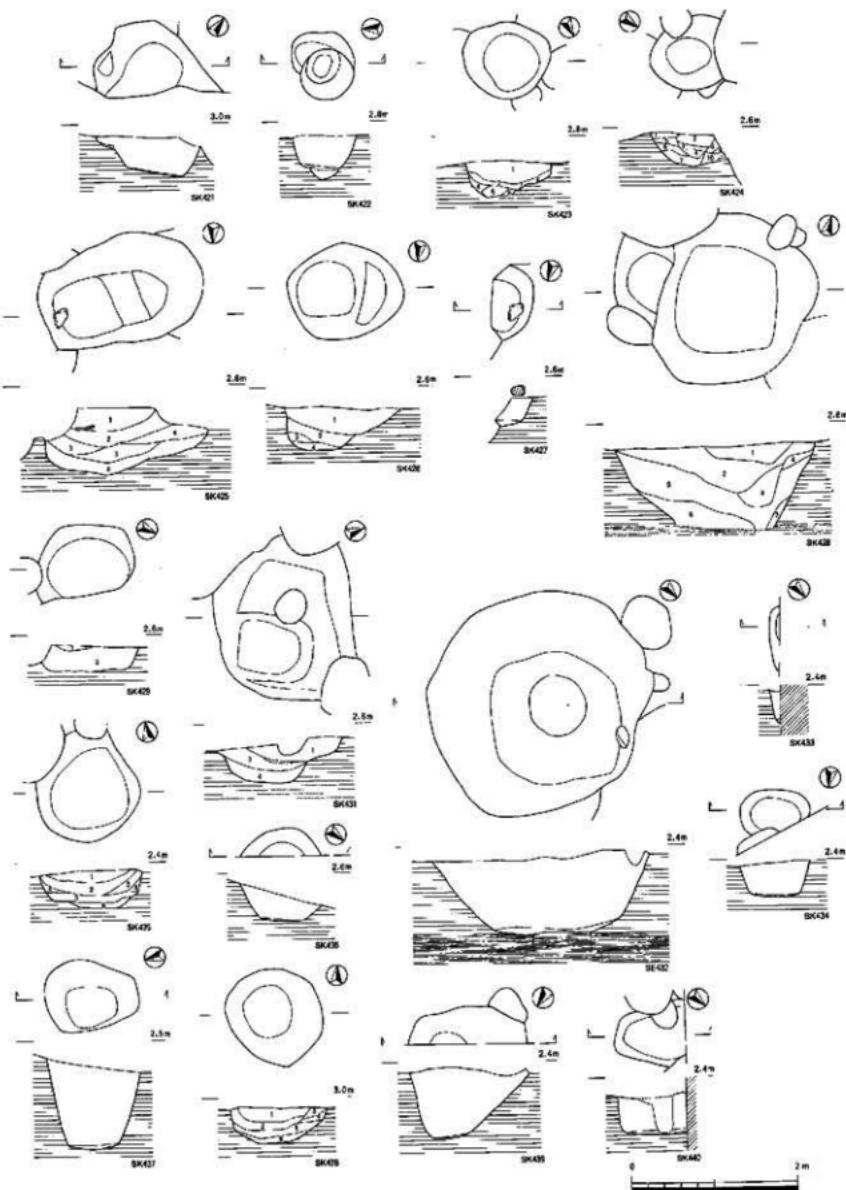


Fig. 21 第4面造構実測図 2 (1/60)

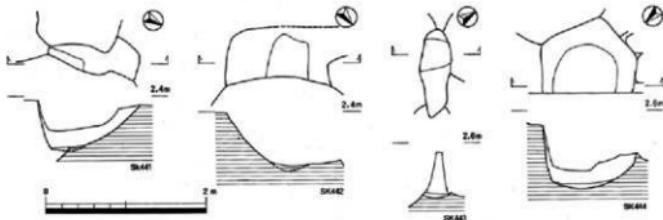
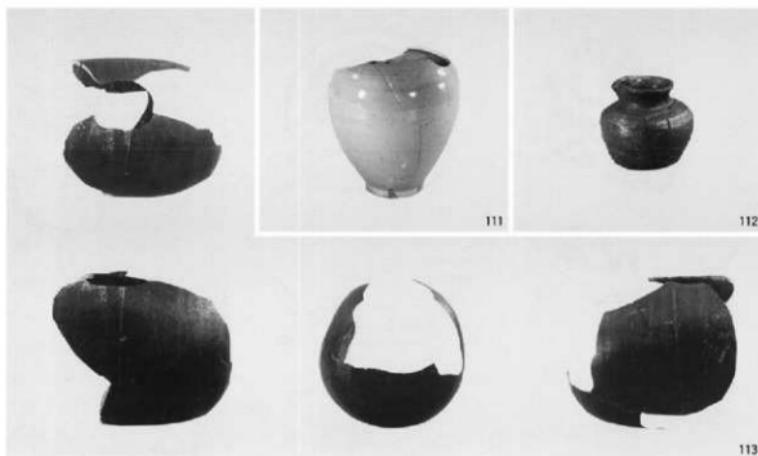


Fig.22 第4面造構実測図3 (1/60)

112・113はSK415の出土遺物である。112は備前の注口付小壺である。胴部にヘラ記号がある。口径4.7cm、底径5.3cm、器高6.5cm。15世紀代の製品か。113は朝鮮陶器の椎形壺である。SK414でも出土しているが、SK415からの混入か。外面はツヤのある黒色を呈し、胴部中央に沈線を施す。格子目タクキの痕跡がみられる。口縁部を欠損するが、欠損部分を頸部部分で丁寧に割り直しているようである。

114～118はSK425の出土遺物である。114は龍泉窯系青磁碗I-3類である。高台径5.4cm。115は龍泉窯系青磁皿I-1類である。口径10.2cm、底径3.8cm、器高2.6cm。116は白磁碗IV-2類である。口径15.1cm、高台径6.6cm、器高6.6cm。117は白磁の水注もしくは四耳壺の口縁部である。端部は外側に折り曲げている。口径10.5cm、頸部径9.0cm。118は中国陶器の皿である。釉は光沢のある暗茶褐色で、一部黄色味がかったオリーブ色に発色する。体部下半露胎である。底部は粗いヘラ切り。口径9.4cm、底径3.0cm、器高3.1cm。

119・120はSK439の出土遺物である。119は土師器の皿である。120は白磁碗0-I類である。内面4ヶ所に白堆線、その上部口縁部に刻みを入れる。口径12.4cm。



Ph.35 第4面造構出土遺物 (112: 約1/4・他: 約1/6)

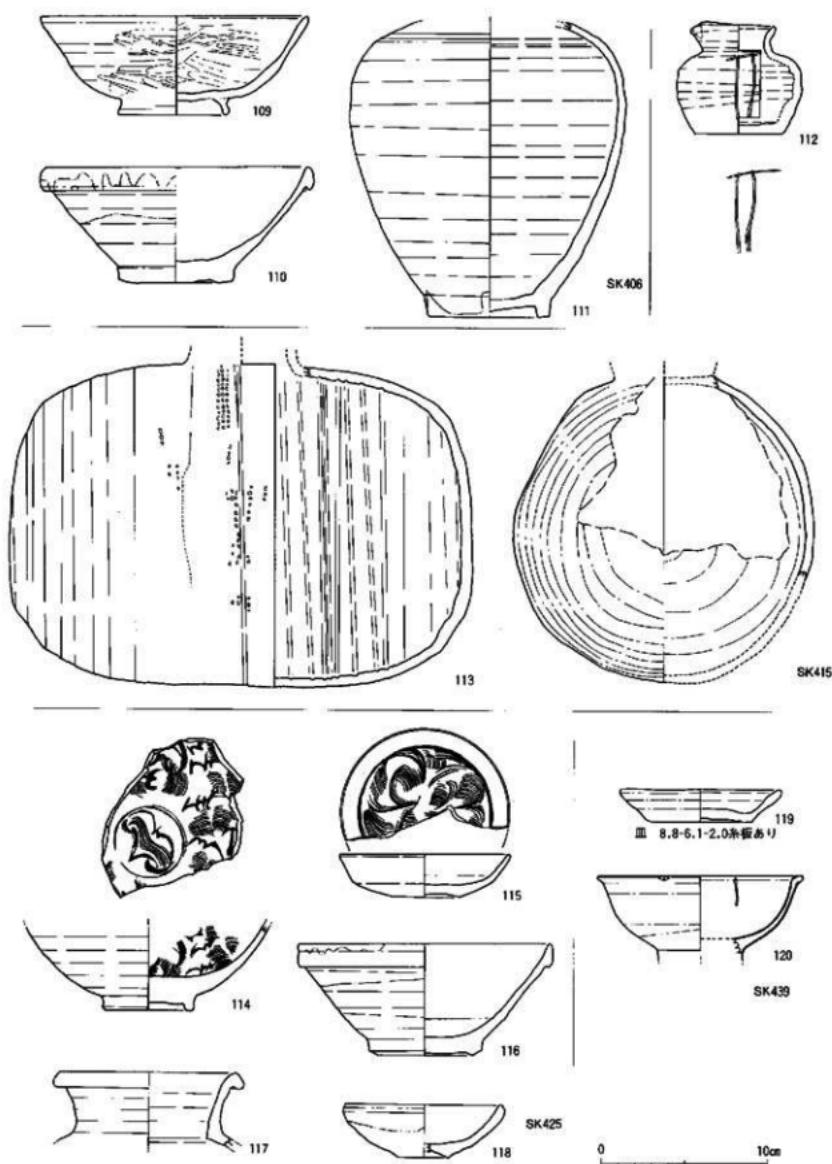


Fig.23 第4面遺構出土遺物実測図 (1/3)

## 6. 包含層の遺物

各調査面の間から出土した遺物は大量にあるがその中で、いくつか紹介する。

121~124は土師器の皿である。博多遺跡群や周辺の遺跡で一般に見られるものと系統が異なる。口クロナデの単位を明瞭に残す。底部は糸切りである。125~129も系統が異なる土師器の壺である。器壁は薄く、ロクロナデの痕跡を明瞭に残す。体部が直線的に開くもの（125・126）とやや内済気味に立ち上がるるもの（127~129）がある。底部は糸切りである。在地の土師器壺と比べると、口径に対し、底径が小さい。いずれも胎土は精良で焼成も良好である。特に129は外面が橙色を呈し、非常に堅く焼けている。大内系の搬入品と思われる。その他のものも大内系土器の何らかの影響を受けたものと思われる。121~129の土師器は127を除いて、2面下のE-6より出土している。同一遺構に廃棄されていたものと考えられる。

130は耀州窯系青磁の印花宝相華唐草文碗である。体部のみの破片で、傾きは正確にはわからない。外面は片切形で線条を入れる。胎土は灰色で堅緻である。釉は光沢を持つ淡緑色。断面の胎土と釉の境目が薄く白くなっている。3面下のE-3出土。このほか耀州窯系青磁はSK106より磨滅した破片が出土している。

131は白磁多角壺である。完形ではないが、復元すると体部は八角形で、高台には4ヶ所抉り込みを入れる。内面に目跡があり、復元すると4ヶ所になる。胎土は白色。釉は光沢はあるが、不透明で、黄色味がかった白色を呈する。高台脇より露胎。復元高台径4.1cm、器高2.8cm。3面下のG-5より出土。15世紀頃の遺物である。

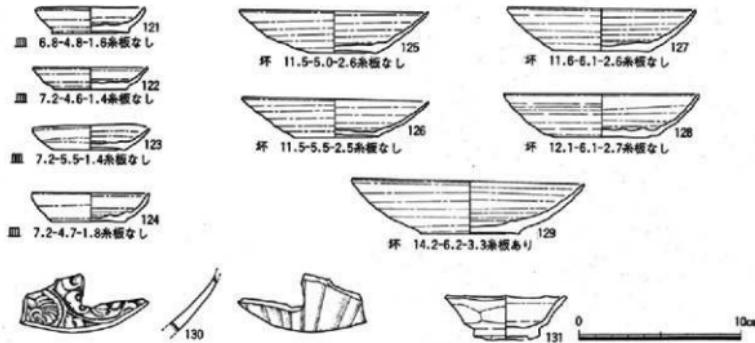
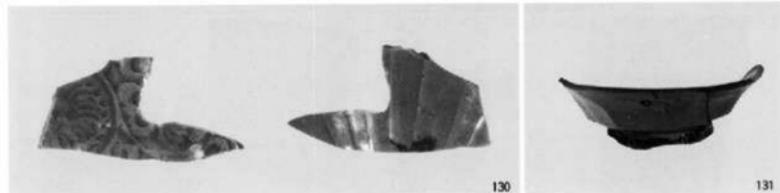


Fig. 24 包含層の出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 36 包含層の遺物 (約1/2)

## 7. 墨書陶磁器

今回の調査では墨書陶磁器が28点出土しており、Tab. 5に一覧を示す。1点は近世のものであるが、残りは中世の貿易陶磁に書かれている。約半数が判読不能であるが、その中には花押も含まれていると思われる。2面下、3面下の包含層出土が中心で、平面位置で見ると、北東部分に集中していることがわかる。これには何らかの意味があると思われる。

「綱」関連が4点、「王」関連、「十」関連が3点ずつ出土しているのが注目される。

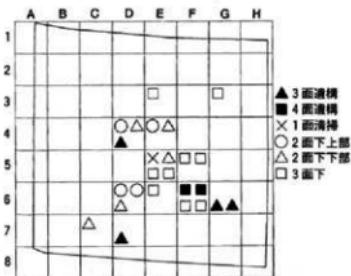
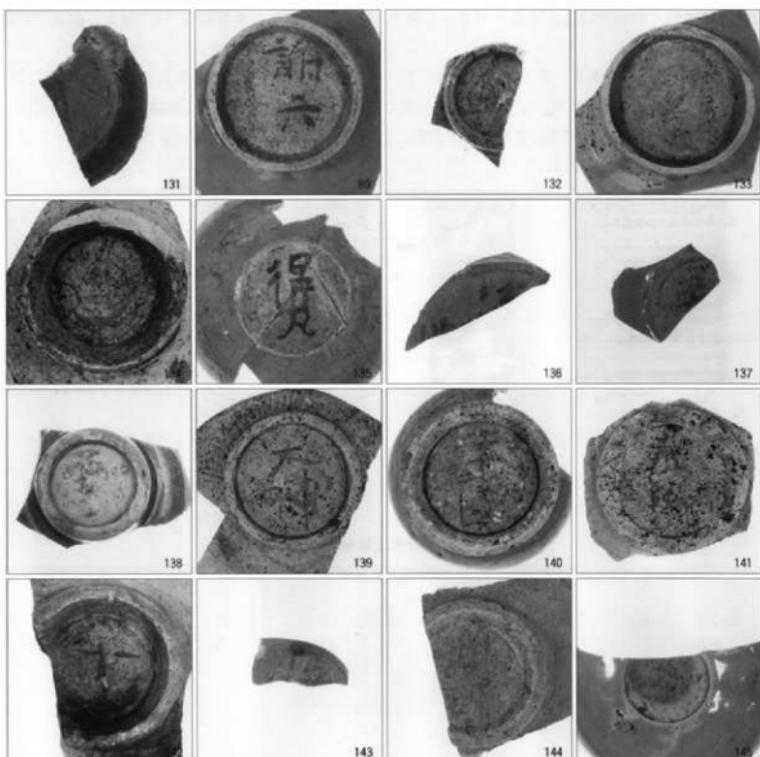
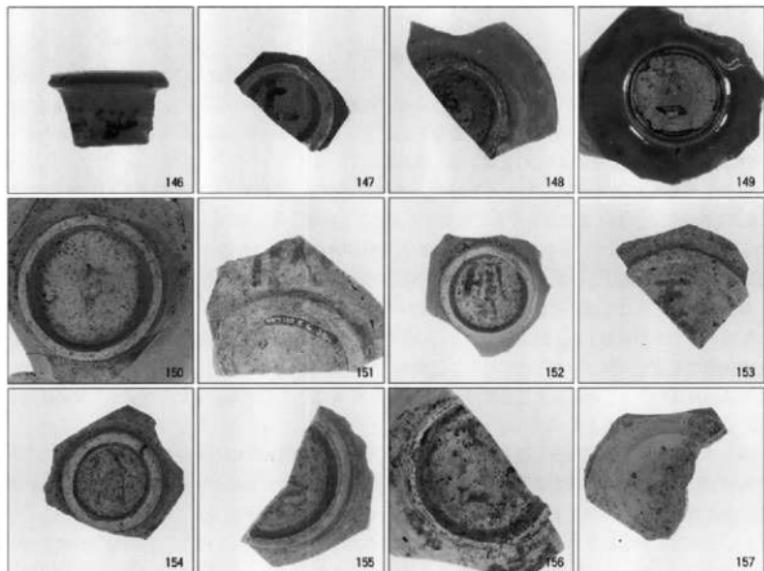


Fig. 24 墨書土器出土グリッド (1/150)



Ph.37 墨書陶磁器 1 (約1/2)



Ph.38 墓書陶磁器 2 (約1/2)

Tab. 5 墓書陶磁器一覧

No.	出土遺構	銘文	器種	墨書部位
131	S E 3 0 7	□	同安窯系青磁皿	外底部
99	S K 3 2 9	需六	白磁碗 VI - 1	外底部
132	S K 3 2 9	□	白磁高台付皿 II	外底部
133	S P 3 0 3 1	周(カ)□/(花押)	白磁碗	外底部
134	S K 4 3 5	六柄(カ)	白磁碗 V - 1	外底部
135	S K 4 3 5 + S K 4 3 ?	得丸	白磁平底皿 VI	外底部
136	1面清掃・擾乱	□/□	龍泉窯器皿	外底部
137	1面清掃 E - 5	王	白磁平底皿 II	外底部
138	1面確認	□	龍泉窯系青磁碗	外底部
139	2面下上部D - 4	大桶	白磁高台付皿	外底部
140	2面下上部D - 6	王(花押)	白磁碗? 盆?	外底部
141	2面下上部D - 6	□□	白磁碗 IV - 2 ?	外底部
142	2面下上部E - 4	十	同安窯系青磁碗	外底部
143	2面下下部C - 7	□	白磁平底皿 II	外底部
144	2面下下部D - 4	綱司	白磁碗 IV - 1	外底部
145	2面下下部D - 6	□	白磁平底皿 VI - 1	外底部
146	2面下下部E - 4	□□	白磁水注	頸部
147	2面下下部E - 5	上	白磁高台付皿 II	外底部
148	3面下E - 3	□	白磁高台付皿 II	外底部
149	3面下E - 5	□	龍泉窯系青磁皿 I - 1	外底部
150	3面下E - 5	十(方)	白磁碗 VI - 1	外底部
151	3面下E - 6	□	白磁碗 N - 2	高台盤
152	3面下F - 5	綱司	白磁碗	外底部
153	3面下F - 5	王□	白磁碗 IV - 1	外底部
154	3面下F - 6	八柄	白磁高台付皿 II	外底部
155	3面下F - 6	□	白磁碗 VI - 3	外底部
156	3面下G - 3	□□	白磁碗 VI	外底部
157	擾乱	十	同安窯系青磁皿 II - 1	外底部

## 8. 製鉄関連遺物

2面から3面に下げる途中で、鉄滓が集中して出土する部分が4ヶ所ほど認められた。周辺には天正15年操業で、戦前まで続いた磯野家、深見家などの鋳物工場が存在し、56次、77次調査ではこれに関連すると思われる鉄滓、輪の羽口、炉壁などが出土している。今回も同一のものと考えていたが、共伴する土器が古く、15世紀代の遺構と考えられた。

出土した製鉄関連の遺物をTab. 6に示す。鉄滓は遺構から328.5kg、包含層から141.2kgで合計469.7kg出土した。輪の羽口は破片数で遺構から70点、包含層から50点の合計120点出土した。羽口片のうち、簡状に残存しているものは20点ある。S X 303は円柱状の鉄滓の固まりであり、炉の底部であったかもしれない。あまりに重く、持ち帰っていないので、表中の鉄滓重量はほんの一部である。

製鉄関連の遺物は3面の遺構と2面下、3面下の包含層でおもに出土している。

鉄滓の出土平面分布をFig. 27に示す。上には鉄滓が2kg以上出土した遺構を示し、下には包含層出土の鉄滓の重量をグリッドごとに示した。鉄滓の出土が南部に集中していることがわかる。

鉄滓の付着物より、炉に砂粒混じりの粘土を貼っていることがわかる。また、初期から最終段階までの鍛冶滓が認められる。

楕形滓の形状より炉底の径を復元するとまちまちであり、複数の炉の存在が推定される。

輪の羽口については、断面より胎土を二重巻きにして作成していることがわかる。また、胎土は稲殻が多く含むもの、砂粒を多く含むもの、砂と粘土が混じるもの等がある。

158・159は輪の羽口である。炉内部側は高温のためガラス化している。また、内壁沿いには鉄滓の付着がある。また、その外側は変色している。158は内径1.8~2.2cm、外径8.8~9.4cm、159は内径2.2~2.5cm、外径8.4cmである。

博多は島津焼き討ち、太閤町割の前後で、町割りが異なるが、この周辺はこの前後とも製鉄関連の地区であったことが判明した。

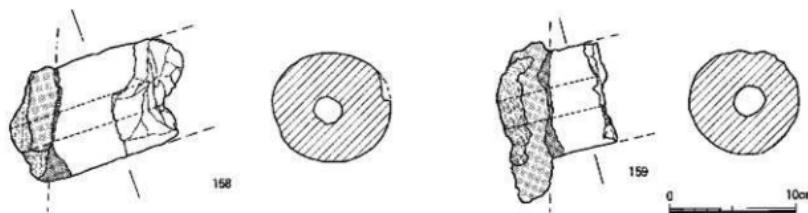


Fig. 26 製鉄関連遺物実測図 (1/4)

Tab. 6 鉄製間違遺物

遺物名・品名	羽口量	羽口点数	重さ (kg)	記号	個数
SK101	0.2				
SK103	0.3				
SK105	0.8				
SK107	0.1	4			
SK108	0.1	2			
SX111	0.9				
SK114	0.1				
SK201		4			
SK202	0.1				
SK204	0.2				
SK205	2.4	3			
SK208	0.7	1			
SK209	1.0				
SK210	0.8				
SK211	0.2				
SP2000	4.0				
ST201	1.6	1			
SX302	66.0	16(5)			
SX303	0.9				
SX304	1.6	15(4)			
SX305	25.9				
SK407	0.6				
SK308	0.6				
SK309	6.2				
SK310	0.7	2			
SK311	2.4				
SK313	25.2	10(8)			
SK314	21.1	7(1)			
SK315	1.6				
SK317	0.6				
SB318	0.5	1			
SK330	0.5				
SK329	0.3				
SP3006	1.1				
SK3066	0.0				
SK412	0.1				
SK416	0.1	1(1)			
SK419	0.8				
SK431	0.1	3			
SX439	14.2				
1面通溝					
1面下 B-2	1.0	4			
B-4	1.0	5			
B-5	0.8				
B-6	1.5	3			
C-4	10.6	2			
C-5	0.6	1			
C-6	0.5	1			
C-7	1.9				
D-3	0.9				
D-4	6.8				
E-4	6.9	1			
E-5	3.0	1(1)			
F-4	1.0				
E-7	1.5				
2面通溝					
B-3	0.2	1			
B-3	1.5				
B-5	6.6	1			
B-6	1.0				
B-7	1.1				
C-5	7.7	2			
C-6	0.9	1(1)			
C-7	1.7	1			
D-5	1.6				
E-5	1.8	3			
E-6	15.0	8			
F-4	6.6				
B-5	6.0	4(3)			
C-4	5.0				
C-5	17.0	2(2)			
C-6	8.8	1			
C-7	1.3	2			
D-5	4.0	1(1)			
D-7	0.7	1			
3面通溝					
B-4	3.7				
B-5	0.5				
C-4	9.4				
C-5	1				
3面下 G-3	0.3				
通孔	1.9				
その他	14.7	2			

注：羽口点数のかっこ内は左の点数中箇間に残存するものの点数

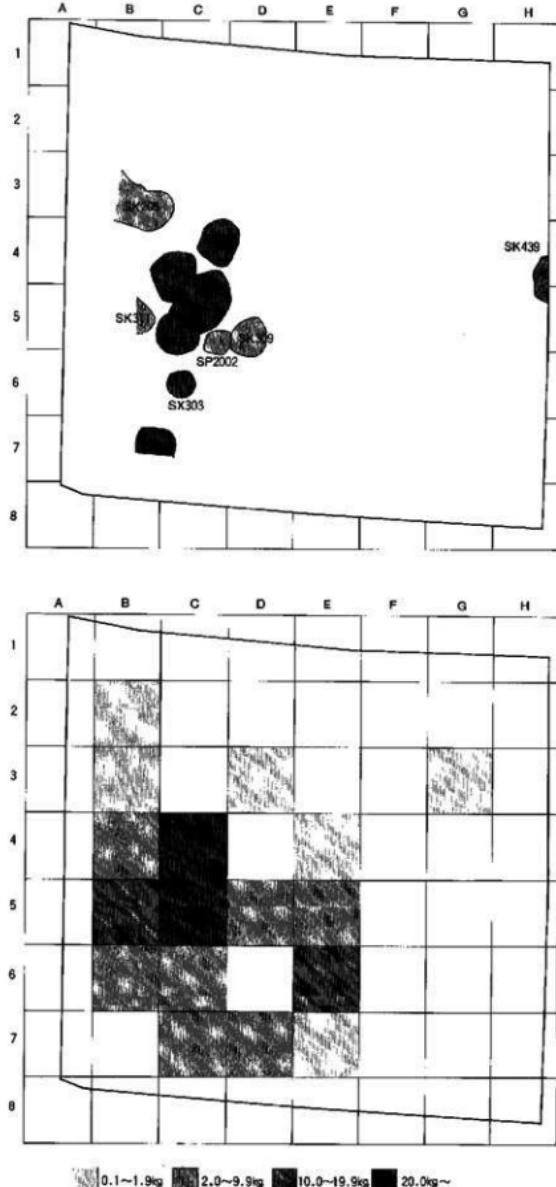


Fig. 27 鉄滓出土遺構位置図 (1/150)

## 9. 錢

今回の調査では32枚の錢が出土した。このうち錢名が判読できたものは24枚である。すべて一枚ずつの単独出土であり、埋納状態や縁錢での出土はない。判読できたもののうち、渡来錢は、北宋錢が17枚で多数を占める。そのほか、唐の開元通寶、南唐の唐國通寶、明の洪武通寶、永樂通寶がある。また、前漢の四銖半両と後漢の五銖が出土している。初鑄年は日本では弥生時代にあたり、弥生時代の遺構から出土することもあるが、今回は出土状況から中世の渡來錢と同時にもたらされたものと思われる。

165は欠損しており、判読できないが、字体から大觀通寶かと思われる。大觀通寶は北宋錢で、初鑄年は1107年である。

Tab. 7 出土錢一覧

No.	遺構名	錢貨名	書体	国名	初鑄年	外縁外径		外縁内径		錢厚	備考
						縦	横	縦	横		
	S K 1 0 2										遺存無
	S K 1 0 2										遺存無
160	S K 1 0 3	熙寧元寶	真書	北宋	1068	21.2	24.1	20.1	20.1	計測不能	1.2~1.4
161	S K 1 0 7	寛永通寶	日本	1636	24.4	24.4	20.0	20.0	20.0	1.0~1.1	
162	S K 1 1 2	入德元寶	真書	北宋	1023	24.9	25.2	20.3	20.3	1.0~1.1	
163	S E 1 1 4	□□寶									欠損
164	S K 2 0 5	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	23.3	23.3	計測不能	計測不能	0.9~1.1	
165	S K 3 0 6	大□□寶									欠損
166	S R 3 0 7	祥符元寶	北宋	1009	25.3	25.8	19.2	18.8	18.8	1.2~1.3	
167	S E 3 0 7	至和通寶	篆書	北宋	1054	24.5	24.4	計測不能	18.7	0.8~1.1	
168	S P 3 0 1 0	五銖	後漢		24	24.8	24.8	22.4	22.4	0.6~0.8	
169	S P 3 0 2 3	咸平元寶	北宋	998	25.0	24.8	18.7	18.9	18.9	1.0~1.3	
170	S K 4 3 9	至和元寶	真書	北宋	1054	24.4	24.5	19.1	19.0	1.2~1.4	
171	1面清掃	元祐通寶	篆書	北宋	1098	24.1	23.9	計測不能	計測不能		弯曲
172	1面清掃	元祐通寶	篆書	北宋	1086	24.3	24.2	20.6	20.4	0.9~1.1	
173	1面清掃	應首錢				15.3	14.3	—	—		
	C-21面下										欠損
174	E-41面下	開元半両	前漢	B.C.175	23.0	23.0	—	—	—	0.7~0.8	
175	E-61面下	大觀通寶	北宋	1017	26.0	25.7	計測不能	20.2	20.2	1.0~1.3	接合
176	2面清掃	永樂通寶	明	1408	25.1	25.1	21.3	21.3	21.3	1.1~1.3	接合
177	C-52面下上部	皇宋通寶	篆書	北宋	1038	25.1	25.4	20.1	19.0	1.2~1.3	
178	D-22面下上部	景祐元宝	真書	北宋	1034						
179	D-52面下上部	皇宋通寶	真書	北宋	1038	24.8	24.6	20.2	20.2	0.9~1.1	
180	E-42面下下部	開元通寶	唐	621							欠損
	E-42面下下部										欠損
181	B-43面清掃	景祐元寶	真書	北宋	1034	25.4	25.6	21.1	21.1	1.3~1.6	
182	E-73面清掃	太平通寶	北宋	976	25.2	25.0	19.5	20.0	20.0	1.1~1.5	
	E-63面下					24.4	22.8	計測不能	計測不能	計測不能	錢厚い
183	撲瓦	府國通寶	真書	南唐	959	25.3	25.3	20.1	20.1	1.1~1.2	
184	撲瓦	至道元寶	真書	北宋	995	24.8	24.9	18.1	18.1	1.2~1.4	
185	西壁清掃	聖宋元寶	篆書	北宋	1068	24.8	23.9	計測不能	20.7	0.7~1.0	
186	出土地不明	洪武通寶	明	1368	22.3	22.5	18.7	18.6	18.6	1.1~1.3	

向きが不明のものは最大値と最小値を記した

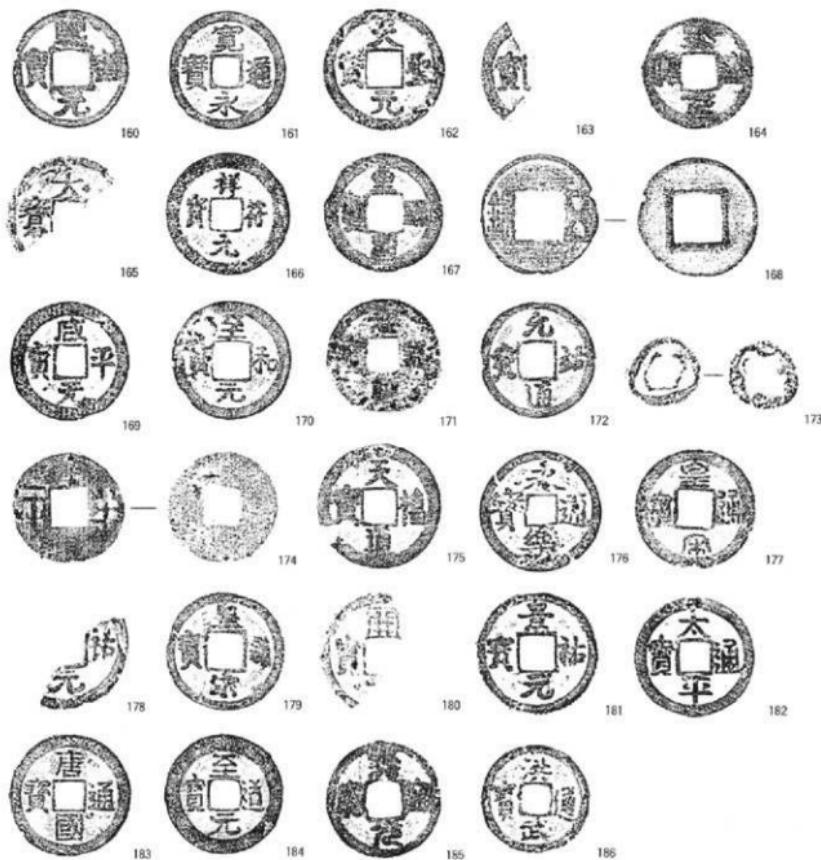
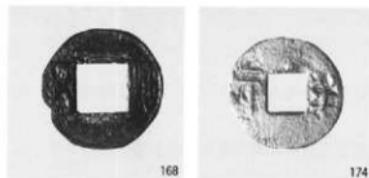


Fig.29 出土錢拓影 (1/1)



Ph.39 出土錢 (約1/1)

### III まとめ

今回の調査地点で得られた成果を簡単にまとめておく

4面の調査面を設定して11世紀後半から近世までの遺構を検出し、貿易陶磁や渡来鏡、在地の土師器などが出土した。

検出された一番古い遺構は11世紀後半ごろのものである。12世紀前半より遺構が増加しはじめ、12世紀後半には最盛期を迎える。この時期の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗が多く出土している。13・14世紀の遺構は多くなく、この時期を代表する鏡裏弁の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類や口ハゲの白磁などほとんど目立たない。15・16世紀は遺構が再び増加し、明代の染付や龍泉窯系青磁、李朝の粉青沙器などがあり立つ。注目されるのは15世紀代の製鉄関連の遺構である。鉄滓、礫の羽口が多量に出土しており、鐵冶炉や廃洋坑かと思われる遺構がある。近世の遺構も検出され、肥前系の陶磁器が出土している。

14次調査の白磁の集積遺構や56次調査の白磁の一括廃棄から、近隣に港の存在が予想されているが、今回は港の痕跡、または、港の存在を推定せるものは確認できなかった。

特記すべき遺物としては耀州窯系青磁碗、朝鮮陶器輪形壺、四銘半両、五銘などがある。いずれも博多の国際性を示すものである。

次に近隣の調査と併せて検討したい。

まず、自然地形について見ると、110次調査地点周辺は息の浜と博多浜が接合するくびれ部分の西側にあり、海が大きく湾入していた部分にある。今回の調査では最下層の基盤は黄褐色の砂層であった。標高は2.3m～2.9mで、緩やかに北西に傾斜している。西隣の14次調査地点では海拔0m付近で地山砂層が北と西に向かって緩やかに傾斜していた。両調査地点の10～20mの間で砂層は2m以上も急激に北西方向へ傾斜していることになる。

次に遺構の広がりに関しては、南東隣の77次調査では8世紀からの堅穴住居、土坑が検出されている。そして11世紀後半より急激に遺構・遺物が充実し始める。10m程しか離れていないが、110次調査地点で遺構が見られるのは11世紀後半からなので、両調査地点の間で、8世紀から11世紀までの間生活域が拡大せず、11世紀後半から拡大し始めるということになる。そして12世紀には14次調査地点、14世紀には87次調査地点まで遺構が拡大している。

砂丘の急激な落ち込みと、8～11世紀までの生活域拡大の停止より、この近辺が長い間波打ち際であったことが推測でき、14・56次調査の大量の白磁が、港での選別、廃棄であったことがより一層明らかとなつたと言えよう。港は大型船が接岸できるような施設ではないと考えられ、積み荷は小型船に移して荷揚げされていたと思われるが実体は不明である。今後の港湾施設の検出に期待がかかる。和歌に詠まれた「袖の湊」にあてはめられた博多の港の発見が楽しみである。

#### 参考文献

- 常松幹雄 1998 「博多遺跡群にみる埋め立てについて」『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
- 大庭康時 1997 「博多遺跡群における考古資料の分布論的検討メモ」博多研究会誌 第5号 博多研究会
- 佐伯弘次 1988 「まほろしの湊」『よみがえる中世〈1〉東アジアの国際都市博多』平凡社  
そのほか関連する福岡市埋蔵文化財調査報告書を参考にした

# 博多 72

—博多遺跡群第110次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第630集

2000年3月31日

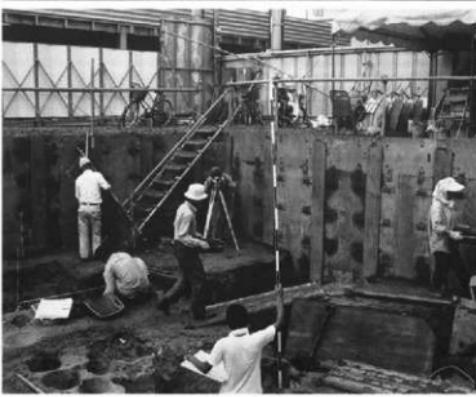
発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1  
☎092-711-4667

印 刷 有限会社 筑紫印刷  
福岡市東区社領3-8-7  
☎092-624-7331

# HAKATA 72

—Results of the 110th excavation of the Hakata sites—

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.630



2000

THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY